

創立者の大学構想についての一考察（1）

通信教育部開設構想とその沿革

塩原将行

目次

はじめに

1. 創価教育の歴史と通信教育
 - (1) 日本における通信教育の発祥
 - (2) 牧口常三郎と通信教育
 - (3) 戸田城聖と通信教育
2. 創立者の通信教育部開設構想
 - (1) 創価大学の設立構想
 - (2) 通信教育部の開設構想
 - (3) 通信教育部開設構想の目指すもの

おわりに

はじめに

本稿では、創立者池田大作先生（以下、「創立者」という）によって開学以前から構想されていた通信教育部開設について、その淵源となる創価教育⁽¹⁾の歴史から考察し、同部開設の意義を考えてみたい。

21世紀に入り日本の大学教育の環境は大きく変化してきた。大学・短大を志願するいわゆる18歳人口が減少し、大学・短大の総入学定員を下回るという時代を迎えた。また、日本の高校生が日本の大学で学ぶとは限らない時代、そして、インターネットなどによって、キャンパスに行かなくても学べる時代になってきた。それは、これまでの大学のあり方そのものを根底的に変えるものであり、新しい大学、新しい教育のあり方が問われている。

それぞれの大学が、生き残りをかけて、時代と社会の変化に適切な対応をし続けることは当然として、いま最も求められているのは、その大学の創立の目的は何かという原点に立ち帰り、そこから出発することではないかと考える。なぜなら、建学の理念こそが、その大学の存在意義であり、それを曖昧にしては、その大学が存在する意味は、厳密に言えば、なくなってしまうからである。創立者がどのように創価大学の設立を構想してきたのか、そして、その構想実現のために、我々はどのように創価大学を発展させていかなければならないのか、創立者の著作や関係文献を改めて読み返し考えてみたい。

そこで、創立者構想の柱となるものは何かを考え、そこからテーマを逐次選択し、考察を進めることとした。最初に通信教育を選んだのは、以下の理由による。

第一に、開学以前から通信教育部開設を構想していたことは、創立者の大学構想の大きな特色であり、先見であると考えたからである。創立者は、学部教育の基盤が確立してから通信教育を始めるというのではなく、開学と同時にスタートしたいと考えていた。創立者の大学構想の中では、通信教育は、オプションやサービスではなく、創立の目的のひとつである。最近は、放送大学以外にも通信教育課程のみの大学が認可されるなど、情報技術の飛躍的な進歩により「通信」という手段が教育方法としても高く認知されるようになってきた。しかし、創価大学が開学した1971（昭和46）年に通信教育課程を開設している大学は、11大学にすぎない。そのような時期に通信教育部開設を構想しているのである。

第二に、通信教育部は、2006（平成18）年に同部開設30周年の佳節を迎え、今や、現在の創価大学の大きな特色のひとつとなっている。現在、通信教育部には、日本の大学通信教育では一番多い約22,000人が在籍し、卒業生も約10,000人、教員採用試験合格者は累計約1,700人である⁽²⁾。なぜ、このように発展することができたのか、それは、創立者が、通信教育においても、学部教育と同じく人間教育を志向したからではないだろうか。そこで、今年、このテーマに取り組むこととした。

第三に、通信教育には、21世紀の大学教育を考える上での示唆があるのではないかと考えたからである。アーノルド・J・トインビー（Arnold J. Toynbee）は、創立者との対談の中で、「知識が常に増大し、しかもその解釈がたえず変化している今日の世界では、フルタイム（全日制）の青少年教育だけでは十分ではありません。引き続いて、生涯にわたるパートタイム的な自己教育をしていく必要があります⁽³⁾。」と述べている。通信教育は、生涯にわたる自己教育に対応できる学習システムである。居住地、生活環境や職業だけでなく、学習にあてる時間、理解力の差があっても、ひとりひとりが自らのペースで、満足感を持って学ぶことができる。

本来、学生は、教員の講義に対して受身の存在ではなく、ひとりひとりが「学習の主体者」であることが求められる。創価とは、「価値を創造する」という意であり、筆者は、創価大学の学生が「学習の主体者」、生涯にわたって「価値を創造する主体者」、と育ててほしいと願う。それも、一部の学生ではなく、入学した大多数の学生がそのように育っていく大学でありたいと思う。そのような教育を考える貴重な示唆が、創価大学の通信教育にはあるのではないかと考えるからである。

最後に、筆者は、創価大学・同大学院を卒業後、母校の大学職員として採用していただいた。最初の配属は、通信教育部の学生係であり、1978（昭和53）年4月より7年半、その業務を経験した。この期間は、同部開設3年目（完成年度を迎える前年）から、10年目までにあたり、学生と教職員が一体となって通信教育部の伝統をひとつひとつ積み上げていった時でもあった。20年以上も前のことであるが、通信教育の業務を経験してきたことも、創立者の大学構想を考える最初のテーマに選んだ理由のひとつである。

1. 創価教育の歴史と通信教育

創立者が、創価大学構想の柱の一つに通信教育をおいた理由を考えるため、牧口常三郎、戸田城聖が行った通信教育事業について述べてみたい。

（1）日本における通信教育の発祥

通信教育が始まるのは、その前提となる近代郵便制度が確立されてからである。1840年イギリスで、ペニー・ブラックと呼ばれる世界最初の切手が発行された。そして、通信教育が世界

で初めて行われるのは1856年、ドイツの言語学者ランゲンシャイト (Gustav Langenscheidts) が語学教育において実施したことに始まる。1871年から1911年の時期は特定できないが、イギリスのケンブリッジ大学では婦人のために家庭でも高等教育が学べる通信教育を始めた。その後、アメリカにも受け継がれ、発展してきた⁽⁴⁾。

日本において、郵便制度が始まったのは、1871 (明治4) 年であるが、通信教育の制度の始まりについて、大学通信教育の世界では、その前身となる講義録頒布をもってその起源としている。1885 (明治18年) 9月の中央大学の前身、英吉利法律学校の講義録、1886 (明治19) 年5月の早稲田大学の前身、東京専門学校¹の講義録がその始まりとされている。このような講義録の時代には、受講者は、校外生として受け入れ、講義録の頒布を主として、添削指導や試験は行われなかった⁽⁵⁾。

のちに大学に発展していかなかったために、歴史の中に埋もれてしまったが、アメリカの通信制大学を参考にして、質問を受けたり、試験も行うような通信教授を行う通信講学会という団体が1886 (明治19) 年に生まれている。斎藤正二は、1889 (明治22) 年4月に牧口常三郎が北海道尋常師範学校に入学するためにどのような方法で学んだかを論証する過程で、通信教育の開拓者として辻敬之と通信講学会に着目した⁽⁶⁾。そこで、斎藤が引用している横山健堂『文部大臣を中心として評論せる日本教育の変遷』(1914年 中興館書店、186頁) を紹介する。

通信教育の嚆矢……伯大木……西村茂樹……山県悌三郎……辻敬之

◎吾輩は、此に、序を以て通信教授の嚆矢を語るべし。通信教授は、明治の文化開発に於ける一大事項なればなり。

(中略)

◎当時、山県の、披読せし外国雑誌の中に、ニュー、イングランドの雑誌に、Correspondence University といへるを発見し、頗る奇異の思を為す。その中に、Instruction by Communication の標題あるを見て、通信に依りて教育を為し得べき方法を啓発せられ、此の事を、辻敬之に話し、工夫の末、通信教授と命名し、『通信講学会』の名を以て、講義録を発行し、意外の成功を収め得たるなり。(以下略)

通信講学会について、『読売新聞』1885 (明治18) 年12月8日付3面には、「○两会設立 米国の通信大学校に倣ひ今度下谷練堀町十四番地の開発社内に通信講学会と云ふ者を設立し通信の方法に依り職業または他の事故ありて学校へ通ふ事の出来ぬ者に各人必要の学科を教授すると云ふ (以下略)」とある。

「通信講学会設立ノ主意書」によれば、同会の創立は、1886 (明治19) 年1月である。同会規則には、「三ヶ月を以て一学期とし六学期を以て一学科を卒業するものとす」「会員は学修せる学科上に疑義あるときは自由に質問することを得べし。但質問に関する往復の郵便税は会員の自弁とす」「学期末に至り卒業試験を望むものは其旨を通知し本会の回答を待て上京すべし但合格者には該学士署名の証書を与ふべし」となっており、開講科目は、鉱物学、生物学、心理学、政治学、数理学、教育学、倫理学、経済学である。

その後まもなく、通信講学会では、試験役員を派遣もしくは委託して、各地方でも試験が行うようになる⁽⁷⁾。

通信講学会以外にも同様の動きが見られる。『読売新聞』1885 (明治18) 年12月10日付2面には、「学術の通信 本郷元町一丁目三番地の有志学術研究会にては今後米国通信大学校の方法

に原づきて同会中へ通信部を設け、学士数名を講師として教育、論理、経済、法理の諸学其他哲学英語学等を通信によりて講授するといふ（以下略）」という記事がある。

このように1886（明治19）年という年は、日本の通信教育の発祥という点で極めて重要な年である。牧口は、1889（明治22）年に北海道尋常師範学校に入学しているから、「小樽警察署にあること四ケ年、その間暇さへあれば読書に余念なく、勉強給仕の『ニックネーム』を得たのもしかあるべきである⁽⁸⁾」の記述どおりであれば、横山が「明治の文化開発の一大事項」であるとした通信教授のテキストに触れた可能性は、齊藤の指摘するように高いかもしれない⁽⁹⁾。

次に、女性を対象とした通信教育の歴史は、1886（明治19）年の通信講学会による『通信教授女子家政学』がその始まりと考えられ、その後、大日本女学会の『女学講義』などいくつかの講義録が出版される。牧口常三郎が、大日本高等女学会を創立し、『高等女学講義』を出版したのは1905（明治38）年5月であり、1899（明治32）年2月の高等女学校令を受けて誕生する第2のグループに属する。同令を受けて、従来家事・女芸中心の講義録とは違った講義録が出版されるようになった。『高等女学講義』はその先駆けと言える。1908（明治41）年に始まる女子大学通信教育会の『女子大学講義』（日本女子大学の通信教育の淵源）の創刊もこの時期である。

○女性を対象とした講義録の始まり（主なものを挙げる）

- 明治19年 『通信教授女子家政学』（通信講学会）
- 明治20年4月 『通信女学講義録』（女学雑誌社）
- 5月 『成立学舎女子部講義録』（成立学舎）
- 明治25年 『女学講義』（女学雑誌社）
- 明治28年 『女学講義』（大日本女学会）
- 明治35年 『女子学芸講習会』（女子学芸講習会）
- 明治37年 『女子学術講義』（東京府教育会附属女子講学会）
- 明治38年5月 『高等女学講義』（大日本高等女学会）
- 6月 『家庭講義録』（日本実業教育会）
- 7月 『家政講義』（大日本家政学会）
- 11月 『高等女学講義録』（大日本淑女学会）
- 明治39年6月 『高等女学科講義』（帝国高等女学会）
- *明治41年4月～『高等女学講義』に改題
- 6月 『女子大学講義』（東京女子大学会）

（2） 牧口常三郎と通信教育

牧口常三郎が通信教育に取り組んだのは、1905（明治38）年5月に大日本高等女学会（以下、本文中は「高等女学会」と略す）を創立してから、1908（明治41）年8月までの期間で、その後、同会は人手に渡ったと思われる。筆者は、既に、牧口常三郎の通信教育とその実施の背景についていくつかの論稿を発表してきた⁽¹⁰⁾。それらと重なる部分もあるので、本節は、新たに明確になった事実を中心に概説することにとどめたい。

① 牧口常三郎が通信教育に取り組んだ時期

牧口常三郎は、1901（明治34）年4月北海道師範学校を退職し、5月に上京する。それは、

それまで、北海道師範学校教諭及び付属小学校訓導として地理教育に携わる中で書き溜めてきた原稿の出版の為であり、そのために、学校を退職し、北海道の教育界における責任ある立場も辞めての旅立ちであった。しかし、北海道で彼が考えていた以上に、東京では無名である牧口の本を出版してくれる書肆を見つけることは困難であった⁽¹¹⁾。履歴書⁽¹²⁾には、「明治三十四年五月一日 上京シ爾來全三十六年十月マテ人生地理学ノ著述ニ従事シ関係諸学科ノ研究ヲナス」とある。しかし、困難の中で、斉藤弔花等の良き友人と、志賀重昂、文会堂の生沼大造を始めとする理解者・応援者を得て、1903（明治36）年10月15日、『人生地理学』の出版として結実する⁽¹³⁾。

『人生地理学』の出版は当時の人々に好感を持って迎えられた。それは、当時の新聞雑誌に掲載された42の書評⁽¹⁴⁾から知ることができる。『活動之日本』の書評⁽¹⁵⁾には、「著者が忍辱の精神と書肆の侠骨とは世の歓迎する所となりて一版瞬時にして尽き二版三版共に飛^(マ)ぶが如く今又四版を重ねたり」とある。それを物語るように、増刷は、初版⁽¹⁶⁾からわずか10日後の10月25日、二版10月28日、三版11月25日、四版明治37年3月25日となっている。総頁で千頁を超える2円もする『人生地理学』が短期間でこれだけの反響をよんだ事は驚くべきことだが、牧口の生活は、出版前に家族で暮らしていた本郷追分町の三疊の部屋から、11月1日より東京高等師範学校の同窓会茗溪会の書記となり、経済的に一応の安定をみたが、それ以外に大きな変化はなかった。研究、教育、進学の道が開かれることはなかったということである。

なぜ、茗溪会の書記の職を得ることが出来たのか。前任者の急な退職により後継者を探していたこともあろうが、牧口を推薦した人物もいたはずである。北海道師範学校時代の牧口を知る有力な人物は、当時何人か東京にいる。その一人は、槇山栄次⁽¹⁷⁾である。また、東京高等師範学校の校長であり、後に触れる弘文学院⁽¹⁸⁾の院長でもある嘉納治五郎と牧口を結ぶ新たな資料も発見された⁽¹⁹⁾。

『人生地理学』を出版した1903（明治36）年10月から、牧口は、茗溪会の書記として、事務を行うとともに月刊教育雑誌『教育』の編集を行っている。そして、履歴書にあるように、茗溪会の書記の傍ら、1904（明治37）年2月10日から、弘文学院講師として地理を教授し、同年8月からは東亜女学校教師として諸科の教授を行うようになる。これらに加え、1904（明治37）年から、渡米協会の演説会で、「米国の人生地理⁽²⁰⁾」「米国の地勢と人生⁽²¹⁾」「米国の産業と地理⁽²²⁾」といった講演を行うようになり、また、北海道出身の杉中種吉が編輯発行する『国民評論』に3回⁽²³⁾、『二十世紀の婦人』に「婦人と人生地理学」⁽²⁴⁾を寄稿するなど活発に活動している。

執筆面においても、牧口が、弘文学院での地理の授業で、中国人留学生のために補助教材としてつくっていたものが、1906（明治39）年初め頃に、『教科日誌 日本地理』、『教科日誌 外国地理』として文会堂から出版されている、また、『人生地理学』も1908（明治41）年10月には、大幅な訂正増補をして出版されていることから、1903（明治36）年からの5年間、牧口は、研究に専念できないまでも、着実に地理学の研究を続けていたであろうと推測される。

② 通信教育事業に取り組んだ動機はなにか

地理学の研究を目的として上京した牧口が、何故、女性のための通信教育事業である高等女学会を創立し、中心になって取り組むことになったのか。その動機について考察を進めていくためには、絡み合ったいくつかの要素を分解してみる必要がある。

『人生地理学』出版後、茗溪会書記の職を得て、雑誌『教育』の編輯を行うようになり、東

京高等師範学校を中心とする教育界を代表する人々の面識も得るようになったが、実は、牧口の心は満足していない。「教育の意義」等の話題で行われた第4回教育茶話会（明治38年5月11日開催）に出席した牧口は、次のように発言する⁽²⁵⁾。

私は只今では斯う云ふ真面目な問題を議論する資格はございません、併し私も先頃お話ししたやうに、永く教育に従事して居りましたもので、斯う云ふ境遇になつても教育に対する趣味は離れません、而已ならず自分も前にやつて居つた事柄でありますから、教育の意義に就いて一言したいと思ひます。
（下線筆者）

高等女学会を創立する直前の牧口の発言である。教育茶話会には、雑誌『教育』の記者として声がかかったと思われ⁽²⁶⁾、高等女学会のことは出てこない。「教育に従事して居りました」、「自分も前にやつて居つた」と教育に携わっていたことを過去形で述べている。つまり、今は、教育に携わっていないといっている。「斯う云ふ境遇になつても」と、『教育』の編集や若溪会の仕事をする現在の境遇に牧口自身が満足していないのではないかと考えられる。さらに、「教育に対する趣味は離れません」と述べていることから、牧口が教育に対して変わらぬ情熱をもっていることが推察できる。20代の研究の集大成ともいえる『人生地理学』を出版し、それが、好評をもって迎えられた後も、心の中には教育に対する「趣味」が強く存在しているというのである。それは、弘文学院や東亜女学校⁽²⁷⁾の教壇に立つだけでは満たされないものである。もちろん、弘文学院での授業から『教科日誌』2冊が生まれ、『人生地理学』が中国語に翻訳された⁽²⁸⁾ことを考えると、授業自体は充実したものであつたであろう。牧口が、通信教育に取り組んだのは、まず前提として、教育に対する熱い情熱を変わらずに持っていたからだ、といえるのではないだろうか。

次に、通信教育に取り組んだ動機として考えられるのは、学校教育の問題解決に、働きながら学ぶ半日学校が理に適つたものと考え、その実践をしようとしたことである。

1906（明治39）年2月に行われた第13回教育茶話会⁽²⁹⁾で、牧口は、当時の学校教育について福沢諭吉の話を紹介して痛烈に批判している。

嘗て故の福澤翁が今の学校は生きた子供の捨処といはれたことがあつたかと記憶して居る。翁は自分の⁽³⁰⁾息をば日本の学校に入れなくて、外国に留学させたといふことである。その当時教育家は一笑に附して耳を傾けるものもなかつたけれども、今考へると〔日本の学校は〕神経衰弱の患者を養成すると警ましめたる言で多少理屈に合ふものであるまいかと考へるのであります。（〔 〕内筆者）

そうならないようにするにはどうしたらよいかということで、牧口は、半日学校について次のように述べている。

人間に学問専門の時代を設けるといふことは理屈に適ふものであるかどうか、全体人間は精神と身体と両方面で生きて居るもので、この両方面が調和して発達して始めて完全なものであらう。それが完全の人間であるのに、今の教育では人間の一代の中に学問専門の時代といふものを設けて居るのである。学校の無い時代には人間の一生の間には殆んど心身共平均に使つて居つた、子供の時代には全く遊び其間に知らず知らず精神の働きをなし、中年以上になると半分は働き、半分は遊ぶ、さう云ふ風に精神と身体と平均にする、即ちそれが人間の生活として丁度必要の所であらうと思ふのに、今の学校が出来てから全く学齢時期からして小学校満八年までは学問専門時代です、それから中学校大学

校に至るまでも皆全く学問専門時代があるので、長くば二十年短かくても八年乃至六年で、一日に六時間乃至五時間やつて、その学問といふものを専心やつて居る、殊に高等女学校生徒の如きは戦々兢々として学校の課程の外、宿題の答案の為に、家事のことは手伝することも出来ない様になつて居る、さう云ふ風のやり方であるから、勢い感神経のみ強くなつて、動神経は衰弱を起すわけ、斯の如くして今の生徒が出来る即ち怠惰者が多くなるのである。それであるから、若し子供と同じやうに遊ぶことの代りに仕事半分、学問半分といふ時代を児童期から連続して中年期になつてもやはり半分は業務、半分は始終絶えず勉強するといふような風にする、それが自然の変化をしていくならば善いものではないか、此点からして今の学校を何うするかといふと、半日学校といふものが本当の正しい理に合ったものであるまいかと思ふ、半日は学校に行かれる、半日は自分の業務に就かせる即ちそれである。

このような半日学校の考えを実現するためには、一つの学校において実行し、それをモデルとして普及を図るといふ考え方も当然あるだろう。それが、なぜ女性を対象とした通信教育となっていくのであろうか。そこには、教育は全ての人に提供されねばならないという牧口の考えがある。

1907(明治40)年12月、牧口は、川越中学で開催した高等女学会の慈善活動写真会場で次のような演説をしている⁽³⁰⁾。

今の世に誰れか女子教育の必要を感じざるものぞ、女子に学問は不要なり、將た危険なりとて惜むべき好學の心を圧欲せし時代は既に去りぬ。而して其の反動は来れり。女子の燃ゆるが如き好學の心と之を遂げしめんとする父兄の熱心とは都鄙至る所に磅礴。之が為めに生徒は全国の女学校の門に溢れ、滔々として大都會に流れ込むなり。知らず各毎年の初めに当り東西より南北より汽車の満載し来る幾萬の女學生中当初の希望を遂げ成功して郷里に歸るもの果たして幾許ぞ。斯くして自ら都會學生の弊風も生ずるなり。さはれ女子教育の勃興は全く時勢の進歩に伴ふ當然のことにして固より慶すべく、國民の半数を占めて男子と共に國家を形造る女子の教育思想の斯の如くなることは寧ろ其遲かりしを憾むべきなり。果して然らば問題は如何にして女學の弊風を防ぎつゝ多数女子の教育を普及して其の希望を満たすか、如何にして國民多数の生活程度に適當する女子教育⁽³¹⁾を施すべきかにあり。(下線筆者)

まず、女子教育の必要性を訴え、弊風を防ぎつつ、多数女子の教育を普及し、国民多数の生活程度(経済力等)にあった教育をいかに提供するかが課題であるとしている。次に、

然るに之に対する女子教育の機関は如何、文部省は銳意之が設備を奨励しつゝあり。民間亦た之れを補ふに幾多の私立学校はあり。然れども年々僅に三萬有余の女子を教授しつゝある現今の設備にては、小学校を卒業せる十數萬の女子を收容するには、甚だ不足なり。近來小学校卒業生の為に補習学校は奨励せらるゝと雖ども、是れ又た女子には男子のものを完備せる後にあらざれば及ばされず、男子には最も便とする夜學の如きも青年女子には其風紀上殆んど不可能に屬せり。加之女学校は、多くは都會に偏するが故に、之に遠かる村落の女子に対しては通學、寄宿共に不便にして且つ不安なるが上に、月々多額の費用を要す。これ我が國中流以下の民度に適せるものにあらず(下線筆者)

希望する女子を收容するにたる教育機関の不足を補い、中流以下の民度に合わせた費用の教育を提供することを述べている。ここにおいても、教育は全ての人々に提供されなければならないという考えが根底に見える。

之が為に、一方には、完備せる女学校に於て、日新の智識を得、更に進んで高等教育さへも受くる者あるに反し、他方には、志を懐いて空しく家に籠り、学問修業の時を過し終に一生学問の不足を嘆き。徒に他を羨むの人となる者甚だ多し。之を女子将来の爲めに図り、国家永遠の後に就いて考ふれば、決して袖手傍観して已むべきにあらず、これ本会の設立せられし所以也。（下線筆者）

恵まれた一部のの人々と対照的に、学問の不足を嘆き、他を羨む人が多い。その人たちに教育の機会を提供したいと言うのである。このように、女子教育の必要性を言っているようで、実は、教育の機会を幅広く提供することに大きな目的がある。当時の日本において、小学校を卒業した女性を対象とした学校教育制度は、男性に比べまだまだ不備である。このことが女性を対象とした教育に踏み出す理由ともなったのではないだろうか。

このような考えが基盤にあればこそ、公的事業でないにも関わらず授業料の減免や、学費無料の附属女芸講習所設立の発想も生まれてくると思われる。

演説では、冒頭、女子教育の必要性は論じているが、三段落に共通して述べられていることは、「多数の女子」、「国民多数」、「中流以下の民度」、「甚だ多し」と表現される大多数の人々への教育の必要性である。『潮』第508号では、筆者の論稿に「牧口常三郎は女子教育の先覚者だった。」というタイトルをつけていただいたが、日本における女性教育の機会均等及びその教養教育における先覚者であったことは歴史的事実である。しかし、半日学校制度論について、『創価教育学体系』第3巻に一章を割いているのに比較し、女性教育に関しては、体系に節すらないことを考えた時、ひとつの仮説が浮上する。それは、女性教育のために通信教育を行ったのではなく、中等教育の機会均等を目指そうとした時、当時男性に比べその機会がきわめて少ない女性を対象に選んだということである。もちろん、女性が学ぶということが、家庭、社会においてどれほど大切かを認識した上である。創立当時の新聞雑誌に掲載された広告には、「教育なき女子は此新進国の良妻賢母たり難し」（『東京朝日新聞』明治38年6月1日付他）とある。しかし、日本全国で家庭にいる女性を対象とし、ニーズの高い教育を安価で提供することは、確かに広いマーケットではあるけれども、極めて不安定な足場で事業を立ち上げることになった。牧口が高等女学会を立ち上げた1905（明治38）年5月は、日露戦争（明治37年2月から明治38年9月）の最後の頃である。海外からの借金で行った戦争だった為、勝ったとはいえ日露戦争後の日本は大不況となる。その時代に、「中流以下の」家庭の女性が、直接家事に関係ない教養を学ぶということは、家庭経済から考えても極めて困難なことであろう。まさにその中で教育事業を起したことは、先覚者と呼ぶに値する。しかし、決して女性だけを意識したものではないと考えるべきであろう。

このような半日学校と、教育の機会は全ての人々に提供されなければならないという牧口の考えが通信教育に結びついたのはなぜであろうか。牧口が師範学校を目指して勉強していた明治20年ごろは既に述べたように日本における通信教育の揺籃期である。印刷された講義録が郵便制度によって定期的に自宅に送られてくるシステムは、当時として極めて新しい試みである。現代のインターネットの普及に相当する。アメリカの通信大学のシステムが紹介され、日本の通信教育はそれを参考に生まれた。しかし、教育の現場を経験している牧口にはためらいがあった。それは、講義録を送るだけでは無責任であるということである。1908（明治41）年2月の教育茶話会でこのように発言している⁽³²⁾。

通信教授を始めて居つたのであるが、その必要を此処に喋々申すことも無用でありますまい。唯だ

其成績が何ふかと云ふことが却つて皆さん方の御疑問であらうと思ひますから、それを簡単に申します。通信教授をしますばかりであると甚だ無責任人のやうでありますから、多少の誘導したら必ず相応の成績はあらうとは存じながら、未だ実行の時機に至りかねて居りましたが、北海道友人中には講義録を中心にして一週間に一回、或は月に一回学校に集めて輪講せしめ奨励した所が「ナカ―成績が宜いと云ふ報告をなし、且つ私共に益々其の奨励して下さる方が多いので益々自信を高めて来ました。其故出来るだけ講義録を改良して当初の目的を達する様にすると共に前に述べました公共的の団体に改めて下層社会の女子に講義録さへも講読の出来ぬ篤学の人には講義を配布することも、是から追々拡張してやる積りであります（下線筆者）

講義録を送るだけでは、甚だ無責任なので、何か「誘導」したらそれに見合った効果が出るだろうと考えてはいたが、実行しないでした。北海道の友人が、週もしくは月一回学校に集めると教育効果が良いと教えてくれたというのである。北海道の友人は誰か特定できない。しかし、そのアドバイスを生かして、女子技芸実習講話会を月一回開催するなど、人間の触れ合いを大事にした通信教育を牧口は行う。

それでは、いつ頃からこのようなことを考えるようになったのであろうか。筆者は、北海道における単級教授の研究と実践と無縁でないのではないかと考える。単級教授は、どのような過疎地であっても、また、教員が不足し、その技術が十分でなくても、与えられた環境の中でいかに子ども達に適切な教育をしていくかということが根底にある。半日学校についても、『牧口常三郎全集』第7巻の注⁽³³⁾にあるように、単級教授の研究の中でドイツにおける半日学校の実践を知ることできる。

しかし、高等女学会の創立を考えはじめたのは、1903（明治36）年10月の『人生地理学』出版後であろう。先に述べたように牧口の上京の目的は、著書の出版と地理学の更なる研究であるからである。同会の創立は、浜幸次郎を幹事、牧口を主幹として行われている。本格的な準備は、中心者となる浜との再会⁽³⁴⁾、打合せをもって始まったと考える方が適当かもしれない。牧口は、浜の北海道師範学校時代の教え子であり、新任教員の時の後輩にあたる。1893（明治26）年4月より牧口は母校の附属小学校の訓導になるが、浜は、1892（明治25）年から1894（明治27）年に同師範学校に在職している。浜との出会いについての詳細は、他日を期したい。また、高等女学会の講義録の講師陣が東京高等師範、女子高等師範の人々が多いことから、茗溪会で縁した関係者によって検討されたのではないかと推測される。しかし、教育を中流以下の階層にまで及ぼすべきだという考えに、当時、一番近いグループということになれば、初期社会主義を担う人々との交流も視野に入れて検討しなければならないだろう。片山潜の後継者として『渡米雑誌』の発行にあたった山根吾一⁽³⁵⁾とは北海道時代から面識があったと考えられ、彼の主宰する渡米演説会の講師も少なくとも三度引き受けている。片山とも交流があったかもしれない⁽³⁶⁾。また、牧口は、斉藤弔花の紹介で尾崎行雄に会おうとしたことは既に紹介した⁽³⁷⁾が、『国民評論』第1号には二人の論文が掲載され、尾崎の論稿が牧口の編集する『高等女学講義』にも掲載されている⁽³⁸⁾ことから、尾崎と編集者として会ったであろう。このように、高等師範の人脈だけでなく、幅広い交流のなかで、高等女学会の構想が練り上げられたと考えられるのである。

牧口常三郎の三男洋三の妻であった金子貞子は、牧口の創価大学設立の構想を聞いたひとりである。金子は、牧口の、「私は大変な苦学をした。勉強したいと思っても学校に行けない人がいるだろう。だから、そういう人のために奨学金をつくりたい」との話を紹介している⁽³⁹⁾。

向学心があった牧口は、13歳⁽⁴⁰⁾まで住んだ荒浜の時代も、小樽で勉強給仕と呼ばれた時代も、思うように学べない苦しみを深く経験している。このような経験もまた、牧口が高等女学会創立に情熱を傾けることになる理由のひとつであったかもしれない。

牧口は、高等女学会を創立し、一身に背負い、その運営にあたるために大きな犠牲を払わなくてはならなかった。それを払ってもなお、通信教育事業はやる価値があると牧口は考えたのであろう。その第一は、高等女学会創立からおよそ4カ月後の10月に、会務に専念する為、茗溪会書記の辞任を願い出た⁽⁴¹⁾。また、弘文学院、東亜女学校も1907（明治40）年4月には退職している。しかし、それ以上に牧口にとって大きな犠牲と思われるのは、牧口の小樽時代の友人、藤山万吉からの研究支援の申し出を、その時点では断ったことである。その話を、牧口は、1908（明治41）年10月に出版された『訂正増補人生地理学』の「第八版訂正増補に就て」に、藤山に対する深い追悼を込めて書いている。既に以下のように要約しているので再掲する⁽⁴²⁾（尚、先生の敬称は略する）。

地理学に新しい時代を開いた牧口が、地理学会のなかで、なぜ大きな位置を与えられなかったのか。それは、地理学史の立場からみると帝国大学に地理学の講座ができ、大学教授らが中心になって地理学の研究が行われるようになったからだとも言われている。

しかし、実はもっと別の大きな理由は自身にあったと思われる。

明治38年秋、日露戦争後の樺太国境画定の仕事を終えて帰京した志賀重昂が、牧口を呼んで、藤山万吉を知っているかと尋ねる。幼い時の大切な友達であると答えると、樺太で会った藤山が、ぜひ友人である牧口の研究の経済的支援をしたいと思っていることを伝えてくれ、と頼まれたというのである。

志賀は、更に諭すように、「西洋でもそのような例はたくさんある。是非受けてはどうか」と言う。しかし、牧口は「私には今、どうしてもやり遂げなければならない仕事がある」といって辞退したというのである⁽⁴³⁾。

翌明治39年8月、牧口は、藤山に会いに行くが、すでに重い病に伏せており、面会はできなかった。以来、二人は二度と会うことはなかった。

ちなみに藤山の養父は、後年小樽公会堂を建築し寄付した藤山要吉である。

藤山の申し出に優先して、どうしてもやり遂げなければならない仕事とは何か。それは、明治38年⁽⁴⁴⁾6月に、牧口が実質的な中心者となって創立した「大日本高等女学会」の仕事、女性のための通信教育の事業である。

このように、高等女学会の創立と運営は、誰かに頼まれてというより牧口自身がこれは何を差し置いても実行したいと思い、強い意思のもとで運営にあたったと考えられるのである。

③ 大日本高等女学会の概要とその活動

a. 大日本高等女学会の創立日について

高等女学会の創立は、1905（明治38）年5月と考える。既に触れた明治42年1月の履歴書には、「一、明治三十八年六月一日 大日本高等女学会ヲ創立シ全四十一年八月マデ其事務並ニ高等女学講義ノ編纂ニ従事ス」と、高等女学会の創立を同年6月としているが、牧口の発言及び収集した新聞・雑誌の広告を整理してみると、5月と考えられるのである。

まず、既に5月に、高等女学会の活動が行われている。

- (イ)「明治三十八年五月二十八日地久節をトシ高等女学講義を発刊して・・・」(「本会並に附属女芸教習所の趣旨」『大家庭』第3巻第1号 明治40年12月)、『教育』63号(茗溪会 明治38年5月15日)、『少女界』第4巻第7号(金港堂 明治38年6月)の広告も「地久節創刊」とする。『東京朝日新聞』(明治38年7月25日)も「五月創刊」とする。
- (ロ)「五月中の申込者は入会金を要せず、六月末までは入学金を半額とす」(『二十世紀の婦人』第2巻第7号 明治38年7月)
- (ハ)『信濃毎日新聞』明治38年5月28日付広告

イは、地久節(皇后誕生日)に『高等女学講義』を創刊したこと、ロは、5月中に入会の申込みできること、ハは、募集活動が行われていたことを示す。

次に、多くの新聞雑誌の広告が、5月創立となっている。

『教育』67号(茗溪会 明治38年9月)に、「本年六月創立初号発刊」とあり、『東京朝日新聞』明治38年9月1日付も、「六月創立」としている。この時期には、6月創立の意識があるのかもしれない。

しかし、明治39年1月から3月にかけて、「本会は昨年五月創立以来非常の隆盛なり」という言葉が新聞・雑誌の広告に入る(『京都日出新聞』1/16、2/1、2/4、『東京朝日新聞』1/14、2/2、3/7、『信濃毎日新聞』2/3、『大阪毎日新聞』1/19、2/1、3/4、茗溪会『教育』73、74、75号、『女学世界』第6巻第5号)。この時期に、『ムラサキ』第2巻第1号の広告は、「昨年六月創立以来」としているが、第2巻第4号では、「昨年五月創立以来」と他と揃う。(下線筆者)

明治39年9月には、「本会は昨年六月創刊以来逐号整頓」と高等女学講義の創刊のことが新聞・雑誌の広告に入る(『大阪毎日新聞』10/9、『萬朝報』9/1、9/14、10/1、『秋田魁新聞』9/1、『東北新聞』9/1、『静岡民友新聞』9/2、『神戸新聞』9/1、『京都日出新聞』9/1、9/4、『大阪毎日新聞』9/1、『福岡新聞』9/1、『北国新聞』9/1、『先世』第1巻第1号)。この時期に、『東京朝日新聞』9/1のみは、「六月創立逐号整頓」としている。誤植の可能性はないか。

女性のための通信教育であることから、皇后の誕生日である地久節を記念して、『高等女学講義』を創刊し、創立の日としたのではないかと考えられるが、逆になぜ、明治42年の履歴書に、牧口が創立五月、つまり、地久節を創立の日と書かなかったのか、興味のあるところである。

b. 牧口常三郎が関与した期間と会員数

高等女学会に牧口が関与した期間は、履歴書に、「全四十一年八月マデ其事務並ニ高等女学講義ノ編纂ニ従事ス」とあることから、1905(明治38)年5月から1908(明治41)年8月までと見られる。その間には、1905(明治38)年の創立から、1906(明治39)年11月には2万有余の会員を有するまでに至った上り坂の時期(いつまで順調だったか不明)と、その後、何らかの事情で事業が行き詰まり、そこから、再起を期して、1907(明治40)年12月、会長に二条侯爵夫人を迎え、慈善の女芸教習所の活動に比重を移し、心機一転、存続に努めた時期に二分される。

会員数については以下の新聞広告に出ている。注に付したように、全国の約80以上の新聞雑誌に新刊紹介・書評、広告が掲載⁽⁴⁴⁾されていることや高等女学会の賛助員⁽⁴⁵⁾に全国の高等女学校長がなっていることから全国規模で募集⁽⁴⁶⁾及び活動を行っていたと考えられる。

創立者の大学構想についての一考察（1）通信教育部開設構想とその沿革

「(明治38年) 9月20日会員一万に達せしに依り」

『大阪毎日新聞』明治38年10月9日、『萬朝報』10月1日、『信濃毎日新聞』10月4日、『土陽新聞』10月4日、『鹿児島新聞』10月4日、『福岡日日新聞』10月4日、『北国新聞』10月2日の各広告)

「六月創刊九月会員一万人に」

(『都新聞』明治38年10月4日)

「大好評を博し己に二万有余の会員あり」

(『萬朝報』明治39年11月11日の広告)

さらに、女学会の所在地で、4つに時代区分できる⁽⁴⁷⁾。それを「資料1 略年表」にまとめた。概ね、三崎町、水道町にあった時期が高等女学会としての興隆期、加賀町、白銀町にあった時期が、慈善活動に比重を移し、存続を図った時期にあたる。

資料1 略年表

明治34年5月 書きためた原稿を出版する為、退職し家族と共に上京
明治36年10月15日 『人生地理学』を文会堂より出版、好評を博す
明治36年11月1日～明治38年12月 茗溪会書記、雑誌『教育』を編輯
明治37年2月10日～明治40年4月 弘文学院講師として地理科教授
明治37年8月1日～明治40年4月 東亜女学校教師として諸科の教授

明治38年5月に大日本高等女学会創立（～明治41年8月）

第1期：神田区三崎町三丁目1⁽⁴⁸⁾に大日本高等女学会を置く 明治38年5月～
女子技芸講習所も設置

『通俗學術雑誌 先世』の編集・発行人を務める（明治39年2月～5月）

第2期：小石川区水道町35に大日本高等女学会を移す 明治39年3月～
『日本の少女』を発行する大日本少女会の主幹を兼務（明治40年2月頃～7月頃）

第3期：牛込区市ヶ谷加賀町2の13に大日本高等女学会を移す 明治40年12月～
女芸教習所は水道町35に

第4期：牛込区白銀町19に大日本高等女学会を移す 明治41年3月頃から8月

明治41年10月 人生地理学訂正増補版を出版

* 明治42年1月 牛込区下戸塚12番地に寄留

明治42年2月2日～明治43年4月23日 富士見小学校の首席訓導

明治43年8月6日 文部省図書課属となり、地理教科書編纂に従事する。

次に、資料として、「大日本高等女学会の役員の変遷」をまとめた。創立当初は、他の通信教育の団体に見られるような華族夫人を会長に置くことはなかった。後年、慈善活動として会

を運営していく必要からか、資料のように会長、副会長に華族夫人を置くようになった。

資料2 大日本高等女学会の役員の変遷

明治38年5月（創立時） 幹事；浜幸次郎 主幹；牧口常三郎

* 浜は、明治38年6月5日に東京市視学に任命される⁽⁴⁹⁾。

明治39年10月 会長 烏丸操子伯爵夫人

明治40年12月 会頭 二条治子公爵夫人 副会頭 青木楠枝子子爵夫人

幹事；浜幸次郎、牧口常三郎、柴田凌雲、有久龍一、山川総太

明治41年3月 会頭 二条治子公爵夫人、副会頭 青木楠枝子子爵夫人

顧問 肝付兼行 他理事18名

c. 大日本高等女学会の活動の概要

高等女学会の活動について、1907（明治40）年12月発行の『大家庭』に掲載された「大日本高等女学会規則要項」には、次のように記されている。

事業 本会は前条の目的を達せんがために左の事業をなす

一、高等女学講義及び雑誌大家庭を発行し之を会員に頒ち以て家庭独修の通信教授をなす

二、慈善教育部女芸教習所を附設し修学の資力なき女子に芸を教授す

三、本邦^(ママ)及び支部に毎月学芸会を開き本部にありて本会講師、支部にありては支部囑託講師の出席を請ひ学科の質問に応じ女芸の実習を指導し講話をなし以て通信教授の及ばざる處を補ふ

四、講義録による卒業生の為に女芸教習所に特別の学級を設け各学科の補習並に女子に必要な芸を授け以て高等女学教育を完全ならしむ

高等女学会の活動は、1907（明治40）年12月の女芸教習所設置前後で大きく変化する。創立当初からの活動は、規則要項一と三の活動であり、女芸教習所設置に伴い二と四が加わった。そこで、その順番に述べていきたい。

『高等女学講義』と『大家庭』『家庭楽』

『高等女学講義』は、1905（明治38）年5月に創刊された。月2回配本され、2年間（半期が一学年）で48冊を学び修了することになっている。1907（明治40）年12月には、修業年限も1年半とし、第3学年以上は、合本となって月1回の配本となった⁽⁵⁰⁾。

また、月刊の女性雑誌として『大家庭』が明治38年11月創刊された。『大家庭』は、第3巻第6号（明治41年4月）まで出版が確認できる⁽⁵¹⁾。

『家庭楽』という雑誌も明治39年2月に創刊された。月刊で、16号（明治40年7月）まで発行が確認できる⁽⁵²⁾。『家庭の楽』とする広告もある。『大家庭』との関係など詳細不明。『岩手日報』明治39年3月24日付の広告等には、「天下最廉の雑誌『家庭楽』初号3万部売切れ、第五版発行」とある。

高等女学会の出版物で現存が確認できるのは、『高等女学講義』第2学年第1号から第4号、第12号（明治38年12月から明治39年5月）（創価教育研究センター所蔵）と『大家庭』第3巻第1号（明治40年12月）1冊（東京大学明治新聞雑誌文庫所蔵）と『大家庭』第2巻第1号の広

告チラシ（明治39年）（創価教育研究センター所蔵）である。

それ以外に、『日清会話 買物指掌』⁽⁶³⁾という小冊子が高等女学会から出版されているが、詳細は不明。『先世』については、197-200頁参照。

女子技芸実習講話会・観楓会・区別懇話会・卒業式の開催等

高等女学会は、1905（明治38）年11月以降、月1回第3日曜に、主に高等女学会の建物で女子技芸実習講話会⁽⁶⁴⁾を開催している。1906（明治39）年1月21日の講話会では、余興としてカルタ会を行っている。既に紹介した「北海道友人中には講義録を中心にして一週間に一回、或は月に一回学校に集めて輪講せしめ奨励した所がナカ〜成績が宜いと云ふ」話を受けたものであろうか。

また、高等女学会は、1906（明治39）年11月3日には滝野川不動寺境内で観楓会⁽⁶⁵⁾を開催している。浜視学、牧口主幹等の講話や插花茶儀実習、余興として遊戯競争、音楽活人画福引等を行い売店も設けるなど、会員約三百余名で記念撮影もする盛大なものであった。

1908（明治40）年2月頃〜7月頃⁽⁶⁶⁾の限定された期間であるが、牧口は、小学生を対象に『日本の少女』（会長：下田歌子）を発行する大日本少女会の主幹を兼務する⁽⁶⁷⁾。そして、その時期、同会の所在地は高等女学会と同じになる。牧口は、高等女学会と大日本少女会の会員による合同の懇談会を東京市内の各区で行い、それに数多く出席し話をしている⁽⁶⁸⁾。また、全国各地での開催も呼びかけている。『日本の少女』第4巻第6号写真版には、横浜日ノ出町で行った懇和会の役員との写真が掲載されている⁽⁶⁹⁾。

また、1905（明治38）年5月の創立から2年半後の1908（明治41）年1月19日には、四谷愛住女学校で卒業証書の授与式も行っている⁽⁶⁰⁾。

慈善教育部の拡張と慈善の女芸教習所の附設

創立以来順調に発展してきた高等女学会だが、明治39年11月に会員2万有余を数えた頃から、明治40年9月⁽⁶¹⁾までの間に、同会に大きな危機が訪れる。このことについては後述する。むしろそれ以降、高等女学会の目指す女子教育の対象がより経済的に豊かでない人に向けられるようになった。そのことを牧口は、「本会並に附属女芸教習所の趣旨⁽⁶²⁾」として次のように演説している。

此に於てか、従来の組織を改め、一層自修者の便を図ると共に慈善の女芸教習所をも附設し学資なきものに無料にて女芸を習はしめ、其の尚通学し能はざる女子に対しては、本会の講義録を給与し、以て能ふ丈、女子教育の普及を下層に及ぼして其の欠陥を補ひ、且つ就職の道を講ぜしむることとせり。

同じ『大家庭』第3巻第1号の「大日本高等女学会の発展」には、「本会の組織変更」として、同会を慈善事業とし、資金援助を募って運営する組織に変更する旨、次のように述べている。

従つて将来に吾人のなすべき事は益々広大となりしかば、今や区々たる私人の事業と為すを以て満足する能はず、公明正大に慈愛の念に厚き熱誠の同志を翕合し、又た世の博愛仁慈の諸君子の贊助を仰ぎ、大に国家社会の為に尽すあらんとし茲に組織を一変することとあり。

具体的には、二条洽子侯爵夫人を会頭に、青木楠枝子子爵夫人を副会頭に推戴するとともに、慈善教育部の拡張と慈善の女芸教習所を附設することになった。慈善教育部の拡張とは、創立当初より、できるだけ学資に乏しく、性質温良の女子に奨励と慈善を行おうとして、「小学校の紹介せる出征軍人の家族には東修免除、月謝半減の特待」「小学校長の推薦にかゝる操行衆に優れ、学校区域内に於て模範となるべきものゝために無東修」を行ってきたが、「当初の企図を拡張し及ぶ丈多くの人々に講義録を給与し、以て女子教育を下層に及ぼし、学術奨励をなす」ことである。牧口は、その趣旨を「篤学の人であつたならばどれだけ自修に依て成績が挙げらるゝかと云ふ一の試験としてもどうか教育して見たいと思ふて講義録を上げる積りであります⁽⁶³⁾」と述べている。

次に、女芸教習所については、「大日本高等女学会規則要領」に「第三 女芸教習所」の項目を設けた。

一目的 教習所は修学の資力なき一般有志の女子に技芸を伝授して就職の途を講せしむる所とす

(略)

一修業年限 修業年限は一ケ年半以内とし 其科目は家事、裁縫、手芸（造花、刺繡、編物、摘み細工、綿細工）簿記、産婆学とす

と定めた。『大家庭』第3巻第1号には、家事科、裁縫科、手芸科（造花、刺繡、摘細工、綿細工）、簿記科、産婆科の講師の名前が主任として掲載されている。しかし、実際に行われたのは、綿細工、裁縫、刺繡である⁽⁶⁴⁾。『萬朝報』明治41年3月29日付には、高等女学会の綿細工講習会の広告が、『東京朝日新聞』にも、同年3月25日付に綿細工講習会の広告が掲載され、3月20日には、綿細工講習会とリンクした「綿細工の有望」という記事が掲載されている。

高等女学会の前半の活動は、「理想」を掲げ、高等女学校に準拠した教育内容を家庭でもできるようにしようとしたのに対し、後半は、体制を変更し、講義録を「下層」の女子に給与し、また、女芸教習所を附属し無料で教育し就職の道を開こうという極めて「現実的」な教育を行っている。経営の危機を経たことだけでは、この変化は説明できない。高等女学会の運営の中心者であった牧口の心に何があったのか。少なくとも、女性の自立が大切であると考えていたのではないだろうか。「本会並に附属女芸教習所の趣旨」の演説はこう結ばれている⁽⁶⁵⁾。

慈善を以て単に困窮者に金品を施与するにあるのみと解するは偏せり。必要なるには相違なし、効果は目前に顕わるゝには相違なし。されど其効果概ね案外に少きが上往々それが為に、依頼心を生ぜしめて思はざる弊害を生ずること恰かも病者に一時凌ぎの投薬をなすが如し。

真正にして、有効なる慈善の本質は、恰も衛生家が病気の起らざる以前に予防するの、却て病後の投薬に勝ること、幾層倍となすが如く、軟弱なる女子をして貧困に陥らざるやうになすにあり。金品を施与して、一時の慰藉を得しむるよりは、職業を与へて、永久に生活法を講ぜしむるは勝り、自ら生活の方法を見出さしめ、偶々陥る場合に処して、恢復の途を講ぜしむる能力を与ふることは、職業を与ふるよりも、更に大なる効果あることを認識するを要す。此意味に於て教育慈善は、進歩せる社会に於て、最も必要なることとして進歩せる慈善家の殆んど一致せる所なり。願くは、目前に直接其の効果の見えざるを以てとして、同情の念を薄からしめざらんことを。（下線筆者）

④ 大日本高等女学会の目的と特色

1905（明治38）年5月の創立当初の高等女学会を知る上で、『二十世紀の婦人』第2巻第7

号（北海道婦人同志会 明治38年7月）の長文の広告は貴重な資料である。当然、主幹である牧口の考えが反映されている。この資料と、『大家庭』第3巻第1号（明治41年12月）に基づいて、高等女学会の目的と特色について述べる。

本会の目的 本会は種々の事情により高等女学校に入ることの出来ぬ女子の爲めに、家庭に於て業務の傍高等女学校の全課程を独習せしむるにあり（『二十世紀の婦人』第2巻第7号）

高等女学会の目的は、ここにも明らかなように、高等女学校に入学できない女子に、その全課程を家庭で自習させることにある。しかし、進学できない最大の理由は学費である。この広告には明らかにしていないが、牧口が、

本会は創立の初より、一方に存立の経営をなすと共に、及ぶ丈け世の学資に乏しく、而かも性質温良の女子に奨励慈善教育を施し、聊か其人の爲め、国家の爲めに尽す所あらんと期し、当時日露大戦役の最中なりしかば、且つ小学校の紹介せる出征軍人の家族には東修免除、月謝半減の特待をなし来り、又た規則中別に特薦生を置き、小学校長の推選にかゝる操行衆に優れ、学校区域内に於て模範となるべきものゝ爲めに無東修、無月謝にて教授することとなし居りしが、（以下略）（下線筆者）

（「大日本高等女学会の発展」『大家庭』第3巻第1号、24-25頁）

と述べているとおり、就学を支援する為に、①小学校の紹介せる出征軍人の家族には東修（入学金）免除、月謝半減の特待、②特薦生を置き、小学校長の推薦にかゝる操行衆に優れ、学校区域内に於て模範となるべきものゝ爲めに無東修にて教授する制度を持っていることである。これは、単なる通信教育で高等女学校に準じた教育を自宅学習させるものではなく、学びたい意志のある女性に対して、広く教育の機会を提供することに目的をおいたものである。同じ『大家庭』に掲載されている規則要項では、創立時と異なる目的が加えられている。これは、授業料無料の女芸教習所の開設に伴ったものである。女芸教習所については後に触れる。

目的 本会は女子に高等普通教育を施し其智徳を高め以て本邦女学の普及発達を図り併せて修学の資力なき一般女子に実用的技芸を教授するを以て目的とす（下線筆者）

（「大日本高等女学会規則要項」、大家庭第3巻第1号、29頁）

次に、『二十世紀の婦人』掲載の広告により、その特色を見ていきたい。

高等女学講義発刊 会員募集

本講義録は、満二ケ年にして高等女学校の各学科を講じ了るべきものにして、其程度は、正しく文部省の示せる高等女学校教授細目に準據し、経験に富みたる教育家が、教室に臨みて、親しく生徒に教授するが如き方法を以て、丁寧親切に講義するものなるが故に之につきて学習すれば高等女学校在学者と毫も異るところなく、しかも経費を節減し得て、安全に家にありて、家業を助けながら、中等以上の学力を養ひ得べきものなり。恰もこれ単に教室を備へざる高等女学校として見らるべきものなり天下幾萬独習生のために彼岸に達すべき津筏を供せんとするものなり。又已に他に嫁ぎ家庭の主婦となりし女子にして、常に密かに学問の不足を感じ、青年女子の教育を羨み、年長け時少きを嘆くものも、現今決して少数にあらず。これら年長女子に向つても本会は、熱誠を以て自修講義録を学習せられんことを希望す。

又学校にては、言ふまでもなく教室の教授を以て主眼とすれば、高等女学生の年齢に於ては、相応に学科の自修を要求するが故に、自修の多少は直ちに成⁽⁷⁷⁾蹟の良否に關す。本会の講義録は、深く此点に注意し、丁寧懇切に自修研究の方法を指導するが故に、労少くしてよく学科の要領を解し、記述の精神を知り、かつ容易く之を記憶し応用することを得しむ因て現在の高等女学校生徒及女子師範学校生徒に取りても、極めて大切なる坐右の師友たるべし。

又已に学校を卒業したる女子も受験其他の必要によりて、学校にて学びし諸学科を、復習記憶するを要する場合決して少なからず。されども浩瀚の書籍につき一々之を反復せんことは容易の業にあらず。本会の講義録は簡明平易なるが上に章節の要を攬りて之を表示しもしくは約説せるが故に、短時間にして復習を終へ、しかも要点を逸さざるなり。即ち高等女学校女子師範学校の卒業生に向つても、研究若くは復習のために、此講義録を利用せられんことを薦むるものなり。

若し夫れ、本会の講義録につきて、熱心に学習せるものによりては、他日女学校任意の学級に入学し得べく、又女教師の検定試験に合格し得べく、将又直ちに高等女学校の卒業試験に及第し得べきことは、今日より之を確保して、本会の榮譽とする所なり。

之を要するに、本会講義録は、女子教育の欠陥を補はんがために刊行せるものにして、主として獨学生のためにし、兼ねて、女学生及卒業生のために自修研究の良師友たらんことを期するものなり。
(下線筆者)

特色としてあげていることを拾つていくと、第1段落では、

1. 2年間で高等女学校の各学科を修了するもので、その程度は、高等女学校教授細目に準拠している。
2. 教室で生徒に授業するような方法で、丁寧親切に講義をするので高等女学校に入学したのとかわらない。
3. 安い費用で学べて、家庭学習なので安全で⁽⁶⁶⁾、家業を助けながら学ぶことが出来る。として、「教室を備へざる高等女学校」と表現している。

第2から4段落では、

1. 高等女学校では、自習をすることが求められ、それをしっかりやっているかどうか成績につながる。丁寧懇切な自習の方法を指導するので、その科目を理解する上で、高等女学校、師範学校生徒にも有益である。
2. 学校を卒業し、受験などにより復習をする場合でも有益である。
3. 志望校受験や検定試験の勉強、高等女学校の卒業試験の参考書としても有益である。として、高等女学校に在学もしくは卒業した女性にも有益であるとしている。

第5段落では、今までのことを要約すると、本会講義録は、「女子教育の欠陥」を補わんがために出版していると書いている。ここでいう「女子教育の欠陥」とは何か、実は、単に、女子教育だけでなく、当時の教育の欠陥と牧口が考えるものを克服せんとするところに、高等女学会の教育の特色があるのではないだろうか。それは、「丁寧懇切に自修研究の方法を指導する⁽⁶⁷⁾」と表現される牧口が北海道師範学校の時からの教育に対する姿勢であり、創価教育学体系に結実していくものではないかと考える。

⑤ 『高等女学講義』の特色

a. 開講科目と講師陣

高等女学会が月2回会員に送る講義録『高等女学講義』の開講科目と講師は、資料によって若干異なる。その変遷の研究は後日の課題として、概要を紹介する意味で、1907(明治40)年

12月発行の『大家庭』掲載の科目と講師を掲載する。創立時の雑誌新聞に掲載されているものは、初年度（第一学年）担当の科目と講師を紹介していると思われるので、創立より2年経った完成年度以降が適切と考えた。（宏文学院については、注18参照）

資料3 『高等女学講義』の開講科目と講師

修身科		東京府高等女学校教諭	市川源三
国語科	講読	東京高等師範学校教授	吉田弥平
	文法	東京高等師範学校教授	吉田弥平
	作文	東京高等師範学校教授	吉田弥平
	習字	東京高等師範学校教授	吉田弥平
		埼玉県師範学校教諭	岩田鶴阜
英語科		文学士	池田夏苗
算術科・幾何科		東京高等師範学校教授	生駒万治
		東京府師範学校教諭	稲垣作太郎
歴史科	日本	東京高等師範学校教諭	峰岸米造
	外国	東京府師範学校教諭	依田 豊
地理科	日本地理	東京早稲田中学校教諭	小田内通敏
	外国地理	本会幹事宏文学院講師	牧口常三郎
		東京府師範学校教諭	依田 豊
		文部省図書課	原田武雄
	地文	東京成城学校教諭	根来可敏
理科	植物	女子高等師範学校教諭	竹島茂郎
	動物	前東京府高等女学校教諭	森川 勉
	生理	本会幹事東京市視学官	浜幸次郎
	化学鉱物	東京宏文学院教授	秋山鉄太郎
	物理	本会幹事東京市視学官	浜幸次郎
家事科		女子高等師範学校教授	宮川寿美子
裁縫科		女子高等師範学校教諭	吉村千鶴子
		女子高等師範学校訓導	市橋なみ子
図画科		東京府師範学校教諭	
		女子高等師範学校講師	森 喜一
女子実業科		東京宏文学院教授	金太仁作
茶儀及插花		日本女子大学講師	児島文茂
割烹		本会理事 割烹専攻	宇山禄子
和歌		日本女子大学講師	三宅花園
女礼法		女礼法専攻	中島義式
文章		東京日日新聞記者	斎藤弔花

（『大家庭』第3巻第1号、明治40年12月による）

b. 講義録の内容の特色

講師陣について、『二十世紀の婦人』の広告ではこのように紹介している。

本会の教師 本会の教師は男女両高等師範学校の諸先生を初め、学識と名望のある方々にて、而かも多年の経験に基づき、誰れにもよく解る様、丁寧親切に講義し、其上各科の研究の仕方をも教授せらるゝものなれば、本会に入学の女子は、恰も実際に全国の模範たる女子高等師範学校の附属高等女学校に入学したると同じ事なるを信ず、(下線筆者)

男女両高等師範学校等の優秀な講師陣を配していることとともに、「誰れにもよく解る様、丁寧親切に講義」し「研究の仕方をも教授」というところが実は牧口のやりたかったところではなかろうか。参考までに、『高等女学講義』掲載された牧口の「外国地理学」の一部分を紹介する。(この引用のみ、原文の香りを伝えたいという観点から極力旧字体で表記した)

まず、「誰れにもよく解る様、丁寧親切に」講義している例を紹介する。

(一) 外国地理が何故必要であらう

ちよこちよいと、外國へ行つて来る様な用事があるでなし、小六ヶ敷しい外國地名の澤山出てくる世界の地理が吾々に何の益に立たう?とは一寸考へるもの誰れでも、思ふところである、が、國を鎮して一切外國の人も物も入れなかつた昔しならばいざしらず、汽車あり、汽船あり、電信あり一瞬千里ともいふべき今の世に、さりとは餘り時勢後れの言ひ草、まあ少し思ひ直して、身の圍りを注意してご覧!。吾々日常の生活に外國の關係の案外に廣大なことに驚くであらう。ランプ下で、此の原稿を書き初めた私は、何よりも先にランプの光りに注意が呼び起こされた。耿々たる光を放つ此石油は露西亞の南方、カフカズの産かしらん、はた北米合衆國の出かしらん、そもいづ處から來たであらう⁽⁸⁸⁾。

次に、「研究の仕方を教授」している例を2例紹介する。

(二) 外国地理研究の注意

教場で親しく教師について教授を受けてさへ、外國地理は覺え惡いものを、況して自筆で自修しやうといふのですから、六ヶ敷しいことは勿論、教える方に於ても、これを趣味を持たせて、面白く教授しやうといふは頗る困難なことである。が併し、物は仕方によるもので、あなたが失望すべきではありません。

そこで、本義に入る前に、一寸皆様にお約束して置きたいことがある。第一が地圖のこと、外國地理に地圖がなくは兎ても習ひ得る者ではない。何うも日本人は地圖を嫌ふやうで、日々新聞に出る記事などにも到底地圖がなければ判らないことが尠なくないが、地圖を開いて見るといふやうな、注意をして居る人が誠に少い。たゞ面倒臭いといふて、雲烟過雁にして居るやうであります。ですから従つて地名などでも一向覺えてないやうだし、偶々覺え居るにしても地圖のどこにあるといふやうなことは無頓着の様である、それを少しの面倒を忍んで、事ある毎に度々出して見て居ると、無意味の地名でも、事柄でも、われわれの頭腦に残つて、多少は其地圖に聯絡しますから、二三回注意して覺えると決して忘れるものではありません。私共の経験で見ますと、地名を覺える爲めに、地圖は不思議な程、力を有つて居るやうである。地理を學ぶ第一の要件として、何より先きに地圖を一々繙いて、それに對照して見るといふことを心掛けて貰ひたい。これが第一のお約束です⁽⁸⁹⁾。(以下略)

す様、偏に切望いたします」といふ趣意でした。牧口氏は登壇はせられず、壇の前に立つて演述されました（以下略）（下線筆者）

イ・ロは、牧口のプロフィールを紹介する記事であり、ハ・ニは近親者の聞き書きによる。イでは、経済不況、ロでは、営利心の欠如、ハでは、資金難、ニでは、他人の保証を引き受けたとある。それぞれ視点が異なる。

二つの牧口の発言から、明治40年12月以前に極めて大きな出来事があったと推測され、2万人を数えた会員は、激減もしくは壊滅状態になり、明治41年1月に「今や会員千余名といふ盛況に達しました」という状態に回復したということであろう。『大家庭』の「新会員名簿（以下次号）」⁽⁷³⁾には、明治40年11月1日以降の新会員と紹介者名が記載してあり、その中で正会員⁽⁷⁴⁾の新会員は22名である。

高等女学会は、経済的に後ろ盾になっている組織、人物が見えない。もしかしたら、存在しないのかもしれない。しかし、創立以来多くの会員を集めたことが事実であるならば、「事に当りたる吾等の不敏」、具体的には「他人の保証を引き受けた」というようなことがあったのではと推測される。日露戦争後の不況の影響があったこと、そして、私的事業でありながら、「中流以下の」多くの少女達に学ぶ機会を提供するために、入学金や学費免除制度を作ったことは、「営利心を容れる余地のない頭脳の持主たる君には、不向の事業であったと見える」と表現されてしかるべきであろう。

「愚直なる熱誠は幾分か社会の同情を受くることとなり」、また、「屈せずに貫いて来て」とあるように牧口を知る人々から応援の輪が広がり、会の体制の建て直しと支援者の確保に努める。しかし、ついに力尽きて、1908（明治41）年8月、牧口は高等女学会から手を引くことになる。

その後、牧口は、牛込区下戸塚12番地に寄留後、1909（明治42）年2月には、富士見尋常小学校⁽⁷⁵⁾の首席訓導となる。この時期、東京市の視学に、高等女学会と一緒に創立した浜幸次郎がいる。しかし、牧口は、一年余り後の1910（明治43）年4月には病気の為、同校を退職する。その牧口が、同年8月には、文部省図書課（後に、図書局⁽⁷⁶⁾となる）属⁽⁷⁷⁾として地理教科書の編纂⁽⁷⁸⁾の仕事に就く⁽⁷⁹⁾。この時、文部省の視学官に槇山栄次⁽⁸⁰⁾がいた。

かつて「上京後の牧口常三郎と『人生地理学』出版に至る経過」という論稿をまとめる中で気が付いたことがある。それは、『人生地理学』を出版することができた最大の力は牧口の人間性であったことだ⁽⁸¹⁾。『神戸新聞』に、斉藤弔花は牧口に対する深い尊敬をもって、『人生地理学』が公刊されたことを喜んで一文を書いた。その中で、斉藤は、牧口は、本から学ぶだけでなく人から人間を学ぼうとしている⁽⁸²⁾と書いている。『人生地理学』を出版した牧口が、女性のための通信教育の団体を創立する、このことは全く逆方向の行動とも思える。しかし、教育に情熱をもつ牧口にとって、人間に向き合っている牧口にとって実は延長線上のことであったのかもしれない。

牧口の手から離れた高等女学会がどうなったかについては以下の3つの資料が存在する。牧口が離れた後も、その活動がしばらくは白銀町で継続されたと考えられ、時期は不明だが、東京高等女学院校長四元内治の手に渡った。

○明治41年10月19日『読売新聞』

白銀町大日本高等女学会慈善女芸教習所製作の綿細工白木屋に展示

○明治41年10月号『亜米利加』

大日本高等女学会が、『女子学芸雑誌』を発行

* 尚、同誌が実在するかどうかは不明。

明治45年2月 本郷新花町に東京高等女学院附属大日本高等女学会。

東京高等女学院校長兼大日本高等女学会幹事長四元内治とある⁽⁸³⁾。

⑦ 大日本高等女学会創立の基盤となる牧口の人道的な考え方

牧口が創立し、運営に当たった高等女学会の活動の特色は、授業料免除の制度や附属女芸教習所に見られるように、私的事業に関わらず、貧しい人への配慮など公共的色彩が強いことである。営利事業に関わらず、この割合が高い場合、自立した経営は当然困難になり、篤志家の応援が必要になってくる。

1904（明治37）年2月10日に、日本はロシアに宣戦を布告、日露戦争が始まる。『人生地理学』が出版された1903（明治36）年10月15日は、開戦4カ月前にあたる。ロシアの脅威から日本を守る為に戦争は不可避なものとして世論が高まっていく中、社会主義者など少数の人々によって叫ばれる非戦論は政府の力も加わり、かき消されそうになる時代である。このような時代に書かれた牧口の『人生地理学』は、帝国主義の本質を厳しく批判している⁽⁸⁴⁾。そして、人道的な国際社会の有り様を、「人道的競争形式」として論じている⁽⁸⁵⁾。人道的競争という考え方は、牧口が参考要書として挙げている中では、直接的には出てこない⁽⁸⁶⁾。人道という言葉が出てくるのは、Paul Samuel Reinschの著書を高田早苗が抄訳した『帝国主義論⁽⁸⁷⁾』である。

帝国主義の時代にあつて、競争という考え方の延長線上に、「人道的競争」という全く異なる考えを示したことは、牧口の中にある人道的思考から来た独創といえるものではないだろうか。帝国主義が世界を覆った時代にあつても、国家の為ではなく、ひとりひとりの幸福を目的とした考え方を持った牧口であればこそ、高等女学会のような事業を行うことができたと考えられる。

（3） 戸田城聖と通信教育

戸田城聖（本名、甚一、大正12年ごろから城外と名乗るようになる。昭和20年7月3日を機に城聖と改める⁽⁸⁸⁾）の教育に関する業績については、私塾である時習学館において創価教育学実践のモデル校としての実践が行われていたことと、『推理式指導算術』という著書が100万部のベストセラー⁽⁸⁹⁾になったこと、模擬試験を行っていたこと⁽⁹⁰⁾、東京拘置所から出獄した戸田が、数学・物象等の通信教育から戦後の再建をはじめたことなどが、創立者の著作、小説『人間革命』等によって知られている。しかし、受験参考書を中心とした多くの著作や、戦前の学習雑誌による通信添削については十分に知られていない。言葉を変えれば、教育者としての戸田城聖について全体像が十分把握されていないのである。

牧口常三郎に源流を発し、戸田によって継承された創価教育の流れが、創立者によって大河となり、創価大学をはじめとしてその構想が大きく花開いている創価教育の歴史を考える時、戸田が創価教育において、どのような役割を果たしたか、明らかにしておく必要がある。そこで、①戸田の編集した教育雑誌、②戸田城外著の受験参考書、及び、本稿のテーマである通信教育に関連する、③戦前の学習雑誌と通信添削、④戦後の通信教育の4点について概説してみ

たい。

① 戸田の編集した教育雑誌

戸田城聖が、創価教育学会創立時に果たした役割のなかで、その重要性が見過ごされてきているものに、彼の出版社である城文堂、日本小学館から発行された教育雑誌の存在がある。その理由は、それらの雑誌自体がほとんど現存していないためである。1933（昭和8）年の『進展環境 新教材集録』1冊、1934（昭和9）年の『新教材集録』8冊の発見によって、空白の部分が少し埋まり、戸田の発行してきた教育雑誌の系譜が見えてきた。それとともに、戸田が教育雑誌を出版することにより、創価教育学の普及に努めていたことが明らかになった。

戸田が最初に出版した教育雑誌は、『新進教材 環境』である。「創価教育学号」と表紙に書かれた第1巻第9号（昭和5年11月20日発行）が現存していると思われる⁽⁹¹⁾。奥付には、編輯兼発行人 戸田雅皓⁽⁹²⁾ 発行所 城文堂とあり、毎月1回20日発行となっている。このことから、創刊は、1930（昭和5）年3月頃と推測される。同誌は、同年5月26日に第三種郵便物認可を受けている。第1巻第10号に甘蔗生規矩の「創価教育学批判」が掲載と1931（昭和6）年3月に出版された『創価教育学体系』第2巻巻末附録にあるが、同号は現存していない。甘蔗生の全く同じ内容の書評が『帝國教育』第583号（昭和6年3月発行）に「ブックレビュー 牧口氏の『創価教育学』を読む」として掲載されていることから、『新進教材 環境』は、購読者がそれほど多くない雑誌ではなかったのではないかと推測している。『新進教材 環境』の名称で何年まで発行されたかも不明である。

この後に城文堂から出版された教育雑誌が、『進展環境新教材集録⁽⁹³⁾』で、1932（昭和7）年12月28日に第三種郵便物認可を受けている。今回、『進展環境新教材集録』第3巻第14号（昭和8年12月発行）を発見し、その中の第3巻全索引から、第3巻第1号は1932（昭和7）年10月に出版されたことが判明した。『進展環境新教材集録』が、『環境』から巻号を継承し、改題されたものとするならば、何故改めて第三種郵便物認可を受けたか疑問が残る。『進展環境新教材集録』というタイトルからは、『環境』を引き継いでいるのではないかと見える。編輯兼発行人は、戸田雅皓、発行所は城文堂である。1932（昭和7）年何月号から改題されたか、もしくは創刊されたか不明である。

『新教材集録』は、第4巻第4号から第10号まで、1934（昭和9）年4月から11月までの7冊を発見した。編輯兼発行人は、戸田城外、発行所は、日本小学館⁽⁹⁴⁾である。

『新教材集録』は、翌1935（昭和10）年8月頃に改題され、『新教』となる⁽⁹⁵⁾。

『新教』は、第6巻第2号から第6号まで、1936（昭和11）年2月から6月までが現存している。編輯兼発行人は、戸田城外、発行所は、日本小学館である。

1936（昭和11）年7月発行の第6巻第7号から、『教育改造』に改題される。この第6巻第7号は現存していると思われる。編輯兼発行人は、戸田城外、発行所は、日本小学館である。『教育改造』が何時まで発行されたかは不明。但し、1941（昭和16）年7月に機関紙『価値創造』が創刊されているが、そこには並行して教育雑誌の存在をうかがわせる記事・広告等はない。

このように、1930（昭和5）年の『環境』から1936（昭和11）年の『教育改造』まで、一貫して戸田が教育雑誌の編輯兼発行人を務めている。

② 戸田城外著の受験参考書

出版が確認される戸田城聖の受験参考書25冊⁽⁹⁶⁾を列記する。これらの著作は、『推理式指導算術』の背表紙に「創価教育学原理による推理式指導算術」と書かれているように、創価教育学に基づいて書かれたものと考えられる。

なお、1939（昭和14）年9月28日付文部次官通牒で、中等学校入学希望者の選抜が、1940（昭和15）年新入生より学科試験を全廃し、小学校長の報告、人物考査、身体検査の総合判定に改革されているので、当然、受験参考書の出版にも大きな影響があった。

<家庭教育>

1. 『中等学校入学試験の話と愛児の優等化』209頁 1円 初版：昭和4年12月1日 城文堂
2. 『中・女学校 試験地獄の解剖』168頁 50銭 初版：昭和8年8月頃 城文堂 『読書標(80)』（東京朝日新聞調査部 昭和8年8月）に掲載されている同書の序は、『中等学校入学試験……』と類似する。関連が考えられる。未見。

<算術>

1. 『推理式指導算術』542頁 1円 初版：昭和5年6月25日 発行所は、第11、16版は、創価教育学支援会。その後、日本小学館。昭和16年8月10日の改版改訂第126版までの出版を確認⁽⁹⁷⁾。第16版は542頁、第126版は584頁。
2. 『普及版推理式指導算術』323頁 60銭 初版：昭和9年4月5日 日本小学館 昭和13年5月10日の第15版まで出版を確認⁽⁹⁸⁾。
- 3～4. 『尋常小学副算術書』尋五用、尋六用、各90頁程度 28銭、30銭 日本小学館 出版は昭和15年1月以前。未見。
5. 『仕上の算術』146頁 30銭 日本小学館 出版は昭和15年1月以前。未見。

<読方>

1. 『推理式読方指導 第五学年用』山田高正と共著 頁数不明 80銭 日本小学館 出版は昭和8年か。未見。*第五学年用が二冊ある可能性がある。
2. 『推理式読方指導 第六学年用』山田高正と共著 423頁 1円 初版：昭和8年4月15日 日本小学館 昭和12年3月25日第24版まで出版を確認。国語読本第十一巻に準拠。
3. 『推理式読方指導 第六学年用』山田高正と共著 日本小学館 国語読本第十二巻に準拠したもの。広告にはあるが、未見。
4. 『推理式指導読方 第九巻 五年前期用』504頁 1円 日本小学館 初版昭和8年4月8日、昭和13年1月20日改版第25版まで出版を確認。
5. 『推理式指導読方 第十巻 五年後期用』約450頁 1円 日本小学館 未見。
6. 『推理式指導読方 第十一巻 六年前期用』579頁 1円 日本小学館 初版：昭和8年4月15日 改版第1版昭和13年3月25日、同第32版昭和14年2月25日まで出版を確認。『読方指導 第六学年用』（山田と共著）と初版の日付は同じだが、この本は、戸田の単著。昭和13年2月の国語読本改訂に準拠し、目次は異なる。
7. 『推理式指導読方 第十二巻 六年後期用』約600頁 1円 日本小学館 未見。
- 8～16. 『自学自習推理式指導読方』尋三前期用、後期用 各25銭、尋四前期用、後期用 各30銭、尋五前期用、後期用 各40銭、尋六前期用、後期用 各45銭の8冊が出版されている。日本小学館 200～240頁。このうち、『自学自習推理式指導読方 尋五前期用』は、296頁 40銭 初版昭和12年5月5日 日本小学館 昭和13年4月20日第5版まで出版を確認。他は未見。同

じ頃に出版か。

<口頭試問>

1. 『必らず聞れる口頭試問—新制度に対応する—』 200頁 50銭 日本小学館 昭和15年以前、未見。
2. 『少国民常識読本—新体制に適応せる—』 200頁 50銭 大道書房 初版昭和16年2月5日 昭和16年6月5日第26版まで出版を確認。『必らず聞れる…』の改題か。

戸田は、「推理式」という学習方法で自学自習を行うための参考書と、親に対する啓蒙書をこれだけ書いている。戸田の著作については、創価教育研究センターで3回の研究会を行った。

『中等学校入学試験の話と愛児の優等化』については杉本芳雄、馬場百々子、『推理式指導読方』については川島清（以上『創価教育研究』第2号掲載）、『推理式指導算術』については梶田尚之、駒野晃司（本号掲載）が行った。『愛児の優等化』では、戸田の全体的な教育に対する考え方を知ることができ、『指導読方』、『指導算術』では、戸田の教育方法の特色を知ることができる。

③ 戦時下の児童に学習の機会を提供した戸田の通信教育

—『小学生日本』⁽⁹⁹⁾と通信添削（1940—42年）—

a. 『小学生日本』の創刊とその改題

1940（昭和15）年5月25日、厚田村の出身である子母澤寛の『大道』を出版したことから、出版社に大道書房と命名した。大道書房は、1943（昭和18）年7月3日、戸田が治安維持法違反、不敬罪の容疑で検挙されたあとの同年11月まで60冊の大衆小説を出版している。

戸田は、この『大道』より早く、同年1月より、小学校5年生を対象に『小学生日本 五年』（小学生日本社）を創刊し、その世代が進級する同年4月、『小学生日本 六年』を創刊している。同年8月には、学年別雑誌の刊行が制約されたため、五年の方の巻号を引き継ぎ、合併して『小学生日本』と改題する。さらに、翌1941（昭和16）年3月1日の国民学校令により、尋常小学校、高等小学校が国民学校になったため、3月号より、誌名を『小国民日本』（小国民日本社）に改題する。さらに、1941（昭和16）年11月頃には、『少国民日本』（少国民日本社）と改題し、1942（昭和17）年4月頃、廃刊となっている。

1940（昭和15）年は、戸田にとって、出版の分野においては、受験参考書の出版から、小学校五、六年を対象とした学習雑誌の発行と大衆小説の発行に軸足を移した時期と言える。受験参考書等も同年以降新たに書き起こされたものは見当たらない。この年は、戸田にとって自らが執筆する時代から、事業の経営者へ脱皮した節目の時期にあたるのかもしれない。

1939（昭和14）年9月1日、ドイツが周辺国へ侵攻したことにより第二次世界大戦が勃発、1940（昭和15）年9月27日は、「バスに乗り遅れるな」と日独伊三国同盟が調印される。このような時代に戸田は、小学生のための学習雑誌の発行に乗り出す。牧口が、創価大学の構想を語っているのも1940（昭和15）年である。慰問袋にも入れられるような大衆小説と比較した時、どの程度の利益が見込めるだろうか。戸田は、人任せにせず、毎号、『小学生日本』の巻頭に子ども達へのメッセージを載せている。同誌が、通信添削を行っていたことを、牧口の通信教育から、創価大学の通信教育へとつながる創価教育の歴史の系譜として紹介したい。

b. 『小学生日本』の特色と誌上考査問題

『小学生日本』は、小学校五年、六年を対象とした月刊学習雑誌である。その特色を戸田は、「創刊のことば」に「さうした諸君に送る『小学生日本』は、楽しく読んで為になる読物と、読む学習と一緒に問題を解きながら記入して行ける勉強室をもつ雑誌です」といつている。創刊号を例にすると68頁の内、後者にあたる「明るい勉強室」におよそ半分の28頁があてられている。その構成は、修身科、読方科、算術科、休憩室、国史科、理科、地理、綴方科、図画科、誌上考査問題となっており、それぞれの科目は教科書にそった問が設けられ、それに記述式に答を書けるようになっていいる。

通信教育という視点から見ると面白いのは、「誌上考査問題」である。見開き2頁に記述式の問題が掲載され、算術科（時間50分）満点35点、国語科（時間25分）満点35点、三科〔注：地理、理科、国史のこと〕（時間20分）30点とある。

『小学生日本 五年』第1巻第1号の「誌上問題応募規則」には、このように書かれている。

- ◇誌上考査は、皆さんの毎日の勉強でどんなに実力が進んだか、全国の皆さんにくらべてどうかといふ、ほんたうの力くらべですから、しんけん^①にまじめに解答して下さい。
- ◇問題の解答は、簡潔、明瞭に書いて下さい。
- ◇答案は採点をし、誤りを正し、懇切に、学び方、考へ方、答へ方を指導し、批評して御返し致しますから、たんに力だめしといふ意味だけではなく、皆さんの先生としてどんどん御参加ください。
- ◇採点は厳重にやりますから、ひととほり出来てゐてもほんのちよつとの点で入選落選のちがひが出来ますから、その点御注意下さい。（下線筆者）

さらに、「参加規則」として、①郵送するのは、見開き2頁の「誌上考査問題」を切り取って送る。②返信料（四銭切手封入）を必ず忘れないよう、返信料が同封してないと返送されない。③締切が1月10日、3月号誌上で成績を発表する、そして、「奨励賞」として、特別優等賞は、特製銀メダルと奨学^{（マ）}紀念品、優等賞は、特製銅メダル、佳良賞は、記念品と書かれている。

『小学生日本』の通信添削は、採点するだけでなく、訂正し、批評も行うというのである。また、奨励賞を効果的に利用し、児童のやる気を誘っている。ちなみに、第3回の成績優秀者は、特別優等賞 95点、94点の3人、優等賞 93点～91点の10人、佳良賞 90点の9名の22名で、参加総人員2,341名の約1%にあたる。このような発想は、戸田が模擬試験を行い、その優秀者に記念品を授与していた経験^{（100）}によるものであろうか。

結果を早く知りたいというのが人間の心である。また、それが、次のやる気につながっていく。第3回の場合、3月10日締切で発表される号の印刷納本が4月8日とあるから、採点と集計に1カ月ない。よほど、「誌上考査問題」を重要視していないと継続してこのような企画はできない。『小学生日本』は、児童の読物と学習のための通信添削の機能をもった学習雑誌であり、戸田城聖もまた、「通信教育」事業を行っていたといえるのではないだろうか。

物資欠乏の時代でもあり、通信添削のため、ページを切り取って送らなくてはならなかった。『小学生日本』が、このような形態をとっていたことも、多くの児童に学習の機会を提供しながら、幻の雑誌となった理由でもあるだろう。

国民学校令により、小学校が国民学校に変わり、1941（昭和16）年3月号より、『小学生日本』も、『小国民日本』と改題される。1940（昭和15）年12月より、「誌上考査問題」も「誌上常識考査問題」と変わった。算術、国語、三科の区別はなくなり、記述式の常識問題にかわる。『少

『国民常識読本—新体制に適應せる—』が大道書房から出版されるのも、1941（昭和16）年2月5日である。戦時下の中生まれた「常識」という言葉は、実は、児童にとって、今までのように学ぶことが出来なくなった時代、「常識」が通じなくなった時代に生まれた言葉のようだ。

c. 誌上考査参加人数の推移

応募した児童人数については、以下の誌名・巻号の「考査問題成績優秀者」欄を確認した。

<五年対象 昭和15年1月開始>

『小学生日本 五年』1巻3号 昭和15年3月号

第1回誌上考査問題参加総人員1,849人 男1,013人 女836人

『小学生日本 六年』1巻2号 昭和15年5月号

第3回誌上考査問題参加総人員2,341人 男1,214人 女1,127人

<五年生対象 昭和15年4月開始>

『小学生日本 五年』2巻4号 昭和15年7月号

第2回誌上考査問題参加総人員2,838人 男1,511人 女1,327人

『小学生日本 五年』2巻7号 昭和15年10月号

第5回誌上考査問題参加総人員3,245人 男1,986人 女1,259人

『小学生日本』 2巻9号 昭和15年12月号

第7回誌上考査問題参加総人員3,594人 男2,147人 女1,447人

<六年対象 昭和15年4月開始>

『小学生日本 六年』1巻3号 昭和15年6月号

第1回誌上考査問題参加総人員3,258人 男1,854人 女1,404人

『小学生日本 六年』1巻4号 昭和15年7月号

第2回誌上考査問題参加総人員3,645人 男1,923人 女1,722人

『小学生日本 六年』1巻5号 昭和15年8月号

第3回誌上考査問題参加総人員4,183人 男2,233人 女1,950人

『小学生日本 六年』1巻7号 昭和15年10月号

第5回誌上考査問題参加総人員4,547人 男2,397人 女2,150人

『小学生日本』 2巻9号 昭和15年12月号

第7回誌上考査問題参加総人員4,737人 男2,591人 女2,146人

<五、六年対象 昭和15年12月開始>

* 「誌上考査問題」から「誌上常識考査問題」に変更

『小学生日本』2巻11号 昭和16年2月号

第2回誌上常識考査 参加総人員8,486人 男4,923人 女3,563人

『小国民日本』2巻12号 昭和16年3月号

第3回誌上常識考査 五、六年9,569人 男5,690人 女3,879人

『小国民日本 国民学校上級生』3巻2号 昭和16年5月号

第5回誌上常識考査問題 五、六年8,946人 男5,626人 女3,320人

<五、六年対象 昭和16年4月開始>

『小国民日本』3巻3号 昭和16年6月号

第1回誌上常識考査問題 参加総人員（5，6年共）8,738名 男5,540人 女3,198人

『小国民日本』3巻4号 昭和16年7月号

第2回誌上常識考査問題 参加総人員（5，6年共）8,840名 男5,626人 女3,214人

『小国民日本』3巻7号 昭和16年10月号

第5回誌上常識考査問題 参加総人員12,028名 男8,735人 女3,293人

『少国民日本』3巻10号 昭和17年1月号

第8回誌上常識考査問題 参加総人員（5，6年共）12,321名 男9,832人 女2,489人

『少国民日本』3巻11号 昭和17年2月号

第9回誌上常識考査問題 参加総人員（5，6年共）12,403名 男9,121人 女3,282人

『少国民日本』3巻12号 昭和17年3月号

第10回誌上常識考査問題 参加総人員（5，6年共）12,456名 男8,426人 女4,030人

1940（昭和15）年1月開始の五年対象は、2,341人から3,594人、その学年が六年になって始まった同年4月開始の六年対象は3,258人から4,737人参加している。同年12月から五年、六年が合併になってからは、2倍強になって、8,486人から（冬休みの時期の）9,569人が参加している。1941（昭和16）年4月開始では、第1回、第2回の8,738人、8,840人が、第5回12,028人、第8回12,321人、第9回12,403人、第10回12,456人と約40%も増え、12,000人台で推移している。1941（昭和16）年5月から8月に、どうして急に増えたかは今後の課題である。真珠湾攻撃（昭和16年12月）による開戦直後の1942（昭和17）年において、これほど多くの子ども達に学びの機会を提供していたことは、創価教育の歴史における重要な事実といえよう。

d. 『少国民日本』廃刊の事情

『文藝年鑑 昭和18年度版』によれば、『少国民日本』の廃刊は、1942（昭和17）年4月とある。参加総人員を見てわかるように、1941（昭和16）年10月以降、12,000人をキープできるほどに定着してきた。部数もそれなりに安定してきたであろう。廃刊する理由は戸田の側にはない。推測を助ける2つの事実がある。第一に、『創価教育学会会報 価値創造』が第9号をもって廃刊になるのが、同年の5月10日であること、第二に、『特高月報 昭和十八年七月分』に収録された「創価教育学会本部関係者の治安維持法違反事件検挙」には、その理由として、「豫てより警視廳、福岡縣特高課に於て内偵中の處、（中略）客年一月頃以降警視廳當局に對し、（中略）縷々投書せる者ありて、皇大神宮に対する尊嚴冒瀆

（127-128頁）とあることである。客年一月とは前年の1942（昭和17）年1月のことである。『少国民日本』の廃刊は、この後にあたる。廃刊にはこのような背景も考えられるのである。

（ちなみに、『小学生日本』等の歴史を明らかに出来たのは、高崎隆治先生、山中恒先生のご研究とご好意によるところが多大である。記して心より深く御礼を申し上げたいと思う。）

④ 日本正学館の通信教育（1945-46年）

1945（昭和20）年7月3日、豊多摩刑務所から保釈出所した戸田は、名前を城聖と改める。そして、事業再建のため、8月20日には、品川区大崎に日本正学館仮事務所を開設し、通信教育の事業を開始する。出獄からわずか一カ月余りで通信教授の事業を立ち上げることができた

のは、今まで述べた『小学生日本』の経験があったからにはほかならないだろう。

この時の通信教育の教材等は未発見だが、新規募集のためには、新聞広告もしくはそれに代わるものは欠かせないので、戸田が、戦後通信教育を積極的に進めた期間とその概要を当時の新聞広告欄から推測する。日本正学館の通信教授の新聞広告は、『朝日新聞』11回、『読売報知』11回、『毎日新聞』14回、『日本産業新聞』（途中から、『日本経済新聞』に改題）11回確認できた。その他に、地方紙にも広告が掲載されている（現在調査中）⁽¹⁰¹⁾ことが判明した。

広告は、時期・内容から、次の3つに分類される。a. 数学物象講座を募集 b. 数学物象に加え、英語講座を加えたもの c. さらに、高専受験科を加えたものである。〔注：高専とは、旧制高等学校、専門学校のこと〕

	最も早い広告	最も遅い広告
a. 数学物象講座	昭和20年8月23日	昭和20年9月1日
b. a + 英語講座	昭和20年9月4日	昭和20年12月30日
c. b + 高専受験科	昭和21年1月5日	昭和21年5月7日

次に、それぞれの代表的な新聞広告の内容を見てみよう。

a タイプ 『朝日新聞』（昭和20年8月23日）

中學一年用 二年用 三年用
 數學・物象の學び方 考へ方 解き方 (通信教授)
 各學年別に數學物象の教科書主要問題を月二回に解説し月一回の試験問題の添削をなす。又これを綴込めば得難き参考書となる。資材関係にて會員数限定 六ヶ月完了 會費各學年共六ヶ月分金廿五円前納 郵便小為替或は振替にて送金の事 住所學校名 學年 氏名明記の上即刻申込みあれ (内容見本規則書なし)
 東京都品川區上大崎二の^(マ)九 四二 日本正學館
 (振替東京壹九九貳五番)

b タイプ 『朝日新聞』（昭和20年9月7日）

中等男女一年用 二年用 三年用 (通信教授)
 數學・物象 英語講座
 學び方 解き方 考へ方 讀み方 話し方 作り方
 各科六ヶ月修了・會費各學年一課目金廿五円前納各學年別に數學物象英語の教科書主要問題を月二回に解説し月一回の試験問題の添削をなす又これを綴込めば得難き参考書となる。資材関係にて會員数限定 郵便小為替或は振替にて送金の事 住所學校名學年氏名明記の上即刻申込みあれ (内容見本規則書なし)
 東京都品川區上大崎二の五四二⁽¹⁰²⁾ 日本正學館
 (振替東京壹九九貳五番)

c タイプ 『朝日新聞』（昭和21年1月11日） ※高専入試添削三ヶ月のもの

英語・数物講座（通信教授）規則書なし
 中等男女一、二、三年用會費一講座廿五円前納六ヶ月終了
 高専入試添削 英語、数学、物象、國漢、會費一科目
 三ヶ月九圓規則書あり要封筒郵券十銭
 東京・神田・西神田二丁目（振替東京一九九二五）日本正學館

c タイプ 『朝日新聞』（昭和21年4月21日） ※高専受験科半年のもの

新	中等・英・數・物	一・二・三年用半年終了
	男女	各學年一科目卅五円前納
開	高専受験科 英數物國	東京・神田・西神田二
	漢月二回	日本正學館
講	模範回答付會費半年卅円前納	郵便小為替便最モ早シ

これらから、日本正学館の通信教授は、1945（昭和20）年8月の終戦直後に始まり、最後の広告⁽¹⁰³⁾から6カ月後の1946（昭和21）年末頃には実質的には終了したと推測できる。

対象は、中学1年から3年生である。本来、戸田は、受験参考書も雑誌も小学校上級学年を主な対象としてきた。何故、戦後において、中学生を対象としたのか、また、戸田の得意な分野である読方も始めなかったのか。あくまで推論の域を出ないが、戸田は、1943（昭和18）年7月から1945（昭和20）年7月まで投獄生活を送り、情報から隔離されていた。また、通信教育を準備する時点では、戦後の小学校教育については、どうなるか先が見えない。しかし、『小学生日本』の世代が、中学生となっており、何を十分に教えてもらえなかったのかわかる。それが、英語であり、算術・物象であったのではないだろうか。そして、持てるノウハウのエッセンスを高専受験講座に集約しようとしたのではないだろうか。

通信教授は、数学・物象の6カ月講座で始まったが、2週間位遅れて英語講座が始まり、1945（昭和20）年12月まではこの3科目で行った。1946（昭和21）年から高専受験のための添削講座が、それまでの英語、数学、物象に国語漢文を加えてスタートする。教育方法は、月2回の教科書解説＝教材送付と月1回の試験問題の添削＝通信添削であった。高専入試添削の期間も当初3カ月であったが、後に6カ月になっている。高専の試験日程との関係であろうか。

どの程度の応募者があったかは、創立者の著した『人間革命』第1巻を参考にする以外にない。「先生、きょうは一万を越えましたよ⁽¹⁰⁴⁾」、「二万円を越す日もやってきた⁽¹⁰⁵⁾」とあることから、一人25円として400通、800通を越える応募が一日で届いたのであろう。

戸田は、日本正学館から、1946（昭和21）年より、『民主主義大講座⁽¹⁰⁶⁾』の出版を開始するとともに、1945（昭和20）年11月には、日正書房⁽¹⁰⁷⁾から子母澤寛『男の肚』上巻を出版、日正書房からは、1945（昭和20）年4冊、1946（昭和21）年9冊、1947（昭和22）年13冊、他に出版年不明4冊が出版されている。戸田は、1946（昭和21）年以降、通信教授から単行本の出版に切り替えた。

さらに、1948（昭和23）年新年号より、日本正学館から、『冒険少年』を創刊し（昭和24年10月号より『少年日本』に改題、12月号で廃刊）、雑誌に軸足を移す。戦後の混乱期にあつて、子どもたちに希望を与えるような質の高い少年雑誌に出版活動の主軸を置くのである。『小学生日

本』のような通信添削を行わなかったのは、戦前に比べ小学校の機能が回復してきたことも関係があるのではないだろうか。

戦後の戸田にとって、宗教団体としての創価学会⁽¹⁰⁸⁾の再建が、最も大きな課題であった。そのような中であって、経済的再建のためという理由はあったにしても、出版事業の中に子ども達との関わりを持ち続けようとしたことは、戸田が、牧口の教育構想の継承を考えていた証左ではないかと考えている。

また、このように戸田が、戦前、戦後にわたり、牧口と同様、通信教授の事業を行ってきたことは、現在の創価大学の通信教育にとって大切な前史といえるのではないだろうか。

2. 創立者の通信教育部開設構想

(1) 創価大学の設立構想

創価大学の「創価」という言葉は、1930（昭和5）年11月18日に第1巻が出版された牧口常三郎著『創価教育学体系』にその源がある⁽¹⁰⁹⁾。牧口は、1932（昭和7）年、麻布新堀尋常小学校⁽¹¹⁰⁾を退職後、創価教育学会、日本小学研究会⁽¹¹¹⁾の活動として講演会、研究会等を活発に行い、1939（昭和14）年12月には、麻布「菊水⁽¹¹²⁾」で創価教育学会第1回総会を行っている。活動が活発になり賛同する教員も増えていく中、この頃、牧口は、創価教育学に基づく学校の構想を、周囲の人に語っている⁽¹¹³⁾。

牧口は、1928（昭和3）年に日蓮の仏法に帰依するが、日蓮の教義に対する研究を深めていくに従い、創価教育学会も宗教団体としての色彩が鮮明になっていく。そして、神札焼却等の行動は国家に反する行為であるとして、1943（昭和18）年7月6日、治安維持法違反、不敬罪の容疑で検挙され、1944（昭和19）年11月18日、獄中に逝去した。

戸田城聖は、1920（大正9）年より、牧口に師事し、『創価教育学体系』の出版に深く関わり、牧口の創価大学創立の構想を最もよく知っていた。戦災と検挙・投獄されたことにより、彼の事業は壊滅的打撃を受けてしまった。出獄した戸田は、事業を再建するとともに、創価教育学会を創価学会と改称し、宗教団体としてその再建と発展に全精力を注ぎ、その生涯を終えた。彼は、牧口の教育の夢、創価大学設立の構想を語ることはほとんどなかった⁽¹¹⁴⁾が、少なくとも次の3度、創立者に対して、もしくは、同席している場で語っている。

第一は、1950（昭和25）年11月16日の日大食堂における戸田城聖と創立者との語らいである。創立者は、日記に、「昼、戸田先生と日大の食堂にゆく。民族論、学会の将来、経済界の動向、大学設立のこと等の、指導を戴く。思い出の、一頁となる⁽¹¹⁵⁾。」と書いている。『新・人間革命』には、「人類の未来のために、必ず創価大学をつくらねばならない。しかし、私の健在なうちにできればいいが、だめかもしれない。伸一、その時は頼むよ。世界第一の大学にしようじゃないか！⁽¹¹⁶⁾」という戸田の言葉を記している。創立者は、この言葉を師の遺言と受け止め、創価大学の設立を考えるようになった。

創立者は、戸田と1947（昭和22）年8月14日に出会い、1949（昭和24）年1月3日には、戸田の経営する出版社、日本正学館の社員となっている。戸田は、入社して間もない創立者を同年5月に、少年雑誌『冒険少年』の編集長に登用している。当時の創立者が教育に対してどのような考えをもった青年であったかを知る手がかりに、『少年日本』1949（昭和24）年10月号掲載の山本伸一郎「大教育家ペスタロッチ」がある⁽¹¹⁷⁾。山本伸一郎はこの時初めて使った創立者のペンネームである。原稿の穴を埋めるため、8月⁽¹¹⁸⁾に急遽この原稿を書いた。その時にペスタロッチを選んでいる。戸田が創価大学設立構想を語ったのは、創立者が心血を注いで編

集にあたっていた『少年日本』が休刊になり、戸田の事業が絶望的な苦境の中にあった時のことである。

第二は、1954（昭和29）年9月4日、創価学会の人材グループである水滸会の野外研修で氷川に向かうバスが八王子方面を通りかかったときである。「いつか、この方面に創価教育の城をつくりたいな……」と⁽¹¹⁹⁾。

第三は、1955（昭和30）年1月22日の高知市内の土佐女子高校での会合で、会員からの質問に答えて「今に作ります。幼稚園から大学まで。一貫教育の学校を作る。日本一の学校にするよ」との戸田の発言である⁽¹²⁰⁾。

次に、創立者自身が、大学設立を自らの課題として構想し始めたのはいつであろうか。創立者は、小平の創価学園の用地を1960（昭和35）年5月3日の会長就任式の一カ月前、4月5日に視察している⁽¹²¹⁾。

そして、公式な場所で、創立者が初めて創価大学設立構想が発表したのは、それから4年後、1964（昭和39）年6月30日⁽¹²²⁾の第7回創価学会学生部総会である。この時点では、1973（昭和48）年以降に創価大学開学を考えていた⁽¹²³⁾。翌1965（昭和40）年11月8日に創価大学設立審議会が発足する。1968（昭和43）年3月9日の設立審議会第2回合同会議で⁽¹²⁴⁾、1971（昭和46）年4月開学に向けて検討が開始され、1968（昭和43）年5月3日の第31回創価学会本部総会において「昭和46年設立へ」と発表される。しかし、創価大学の具体的な構想は示されていない。

ちなみに、1971（昭和46）年は、牧口常三郎が新潟県刈羽郡荒浜村（現在の柏崎市内）に1871（明治4）年旧暦6月6日に生誕して、100年の佳節にあたる。

（2）通信教育部の開設構想

創立者が具体的な大学の構想を初めて示した⁽¹²⁵⁾のは、1969（昭和44）年4月2日に創価大学起工式を終えた、同年5月3日の第32回創価学会本部総会である。そこで、通信教育の構想も発表になる。創立者は、建学の精神を紹介するとともに、「また、これらは最初からは無理かもしれませんが、通信教育や夜間部もできるだけ早く始めたい。夜間部ができれば、昼間働きながら夜勉強することが可能でありますし、通信教育ならば、年齢、職業、居住地等に関係なく、あらゆる人が勉学にいそむることができることになります。」と述べている。小説『新・人間革命』で、創立者はこのように書いている。

さらに、伸一は、民衆に開かれた大学として、将来、通信教育部を開設する展望を語っていった。

彼は、建学の構想の段階から、いち早く「通信教育部」に焦点を当てていたのである。

「かつて一人として民衆の要求にもとづく大学の設立を考えた者はいない」とは、文豪トルストイの指摘だ。今、伸一は、その課題に、敢えて挑戦しようとしていたのである⁽¹²⁶⁾。

創立者が、「通信教育」について触れた最初の発言だと思われるのは、創価大学設立構想発表の2年後の、1966（昭和41）年3月28日の創価学会高等部中等部合同部員会である。「できるだけ大学へはいきなさい⁽¹²⁷⁾。家庭の経済が許さないときは、自分で働いて夜学へいきなさい。通信教育でもいいのです。自分の力で大学は出なさい。男子高等部員は、いまからこの決意でいきなさい。⁽¹²⁸⁾」と述べている。1966（昭和41）年に通信教育課程を設置している大学は10

大学、長期の夏期スクーリングなど仕事を抱えて学ぶには制度的にまだまだ困難の多い時代であった⁽¹²⁹⁾。創立者は、1969（昭和44）年8月15日の第2回高等部総会においても、「どうか高等部員は、特に男子は、一人もれなく大学に進み⁽¹³⁰⁾」と講演している。

開学の前年、創立者は、1970（昭和45）年12月24日の第133回本部幹部会で、「創価大学には、将来、通信教育部をつくり、働く青年らに勉学をする機会を与えてあげたい⁽¹³¹⁾」と重ねて通信教育部設置の構想について述べている。開学時に、通学課程と同時に通信教育課程も最初から設置できないかという構想があった。岡安博司（創価大学顧問）は、実際に通学課程とともに同時申請が可能か文部省に確認に行き、規則はないが前例がないと申請を断われたと証言している⁽¹³²⁾。

1971（昭和46）年1月25日に創価大学の設立が認可される。創立者は、同年2月11日の竣工式には出席し、挨拶をしているが、3月16日の多くの来賓が招待された落成祝賀会、4月2日の開学式、4月10日の入学式に出席していない。

しかし、『朝日新聞』1971（昭和46）年3月16日付23面「開学」というインタビュー記事と、同年4月2日の『聖教新聞』4面に掲載された仙石三郎の特別寄稿「創価大学の開学」から創価大学開学前の創立者の心境を伺うことができる。

『朝日新聞』では、「菊づくり 菊見るときは かげの人」との句を引いて、創立者としてあくまでかげから応援していく心境について触れている。仙石氏の寄稿には、通信教育についての創立者の考えが次のように紹介されている。

そして、創立者は「文部省の認可が四年後でないとおりにないので残念ですが」といいながら、創価大学のもうひとつの設立目的をこう説明した。「これからの教育のひとつに高年層の勉学があげられます。戦争で貧しかった国民の多くは、戦前、大学にはとてもいけなかった。そうした四十代、五十代、六十代のひとにも大学で勉強ができるようにさせたいのです。四年後には、通信教育学部をつくります。学歴はいりませんから、本当にもう一度、勉強したいという高年者に入学の機会を与えたいですね。きっと実現させます。創価大学の使命のひとつになると思います。」（下線筆者）

創立者の、「文部省の認可が四年後でないとおりにするのは残念ですが」との発言は、岡安の語と符合する。「これからの教育のひとつに高年層の勉学」を挙げ、「創価大学の使命」とまで言っている。『朝日新聞』のインタビューに、一步引いて、かげから応援すると答えている同時期に「きっと実現させます」とまで言っていることに創立者の強い意思が感じられる。換言すれば、創立者にとって、通信教育を通じて実現したいものが、それほど創価大学の設立に不可欠なものであったのではなかろうか。

通信教育部開設が認可されるのは、開学から5年後、1976（昭和51）年2月である。同時に大学として始めて学部増設を申請し、経営学部と教育学部が認可された。また、この年の入学式には、正門の開通式が行われ、門標には、牧口常三郎の筆による「創價大學」の文字が刻まれることとなった。通信教育部は、開学時には開設は出来なかったが、大学建設の第二節に開設されたのである。創立者は、「通信教育部の設置は、創立当初からの私の念願で、いわば『第二の開学』ともいうべき慶事でした。⁽¹³³⁾」と述べている。

1976（昭和51）年5月16日の通信教育部開学式の創立者メッセージ「建設の学徒の未来に栄光あれ」（以下、開学式メッセージという）の冒頭に「通信教育部の設置は、創価大学設立の構想を練りはじめて以来の、私の念願でありました。」と述べている。通信教育部の設置は、大学

構想の途中から付け加えられたものではなく、「念願」としてきたことである、つまり、創価大学の構想に必要な不可欠のものであったというのである。

（3）通信教育部開設構想の目指すもの

通信教育部開設にあたり、創立者の目指したものは何かを、1976（昭和51）年5月16日の開学式のメッセージを中心に考えてみたい。この日、創立者は長文のメッセージをテープに吹き込み発表した。そこには、創立者がなぜ通信教育部を開設したか、どのような通信教育を目指しているかが述べられている。このメッセージを中心に以下の3つの視点から見ていきたい。

① すべての人々に開かれた大学

開学式メッセージでは、通信教育部開設が創価大学設立構想を練りはじめて以来の念願であった理由として、「教育の門戸は、年齢、職業、居住地のいかんを問わず、すべての人々に平等に開かれねばならない。まして、本学が、“人間教育の最高学府”を目指す以上、教育の機会均等化をはかるために、通信教育部を置くことは重要な課題であると考えてまいりました。」と述べている。

前段は、教育の機会均等への創立者の強い意志であり、後段は、建学の理念の根幹をなす“人間教育の最高学府”との関係である。創立者は、「人間教育」の実現には、教育の機会均等、万人のための教育の機会を設けることが、重要な課題であるというのである。

前出の寄稿において仙石三郎は、開学時の創立者の興味深い話を紹介している。

ある時、私は創立者に応募状況をたずねたことがあった。返事は意外な表現ではねかえってきた。

「それがですねえ、可哀想なんです。多すぎるんです。」——深刻な表情だった。

「可哀想」という表現に、私は感動した。創立者の心情は一般の通念とは違って、合格者より落伍者へまず向けられていたのである。そうした発想が、今後どのように結実するのであろうか。

岡安顧問も3回受験して不合格だった人は合格させることはできないかという創立者の言葉を記憶している⁽¹³⁴⁾。ともに、受験生、なかんずく不合格の人のことを思う発言で、創立者の考える「人間教育」を垣間見ることができる。人格の育成を目指す教育を志すとすれば、それを望む人間を機械的に断るということは、本来はできない行為なのではないだろうか。大学教育は、「大学設置基準」により教員数・施設・校地等により収容定員の基準が定められ、認可された定員の許容範囲内の学生数で行わなければならないのは当然である。しかし、その痛みと矛盾を忘れては、創立者のいう人間教育実践の第一歩には立てないであろう。さらに、教育を受けたいと思っている人間の希望を阻害する要因として、収容定員はその一部にすぎない。経済的事情、家庭的事情、健康上の理由など様々あげることができよう。

創立者が掲げた、「人間教育の最高学府たれ」の「最高学府」とは、小学校・中学校・高等学校の上に大学があるから最高学府であるというような、雑壇の最上位という意味ではない。人間教育の模範の学府、そのためには、学びたい人が学べないという矛盾を改善する努力をして初めて人間教育の最高学府たりえる、といえるのではないだろうか。

創立者は、「大学は大学に行けなかった人々のためにこそある⁽¹³⁵⁾」との趣旨の話を何度かしている。大学に学んだ人は、その人たちに何らかの形で貢献していくという心を忘れてはいけないというのである。しかし、この言葉は、もう一面、大学人として、目の前の学生だけを見

るのではなく、様々な事情で学べなかった、入学できなかった人に対する配慮を忘れてはいけないという「教育の機会均等」をより具体的に、精神として表現した言葉ではないかと思う。

ここで、創立者の青年時代について少し触れておきたい。創立者は、1945（昭和20）年9月、友人の紹介で、神田・三崎町の東洋商業（現・東洋高校）の夜間2年に中途編入する。1948（昭和23）年3月、同校を卒業し、4月には、大世学院（現・東京富士大学短期大学部）政経科夜間部に入学する。しかし、1949（昭和24）年には、戸田の事業の残務整理と新規事業を軌道に乗せるために、夜学に通うことが出来なくなり、やむなく大世学院を休学している。働きながら学ぶ人の気持ち、種々の事情で、学ぶことができない悔しさ、これを青年時代に経験していることも、創価大学創立にあたり、二部や通信教育部の設置を構想した底流にあったのではないかと、推測している。牧口常三郎も師範学校入学前に働きながら学んでおり、戸田城聖も、1920（大正9）年、開成予備学校夜間部⁽¹³⁶⁾に通うなど同様の経験をしている。

創価大学は、開学の年、1971（昭和46）年の夏、市民講座を開催した。翌年からは、夏季大学講座として毎年1万数千人が学ぶ講座として現在に至るまで開催している。毎年参加を楽しみにしている方も多く、開設以来毎年参加してきたことを誇りとしている方も多数いる。また、寄付者の中には、自身は大学に学ぶことが出来なかったのだと、真心の寄付をしてくださる方も多いと聞く。「創価大学は、民衆立の大学」とは、何度も耳にした言葉である。創立者の「大学は大学に行けなかった人々のためにこそある」との言葉は、創価大学の根幹をなす精神として忘れてはならない。

牧口常三郎は、『創価教育学体系』で、「教育の機会均等主義の承認されたる今日に於いては⁽¹³⁷⁾」、「さはあれ、社会意識は急速に発達しつつあり、所謂教育の機会均等の主義の下に小国民の総動員をなし⁽¹³⁸⁾」と述べている。しかも、牧口は、実際に、中等教育の機会均等のために1905（明治38）年から1908（明治41）年にかけて女性の為の通信教育事業を行っている。戸田城聖もまた、戦時下において十分な教育の機会が奪われた児童のために通信教育を行っている。すべての人々に教育の機会を提供していくという考え方は、牧口常三郎、戸田城聖、創立者池田大作の三人を貫く、創価教育に一貫して流れる考え方ではなかろうか。

② 働きながら学ぶ学習形態

開学式メッセージでは、続いて、牧口常三郎の「半日学校制度」を紹介し、その意図するところは何かについて以下を引用している。

「半日学校制度の根本義を要約すれば、学習を生活の準備とするのではなく、生活をしながら学習する、実際生活をなしつつ学習生活をなすこと、すなわち学習生活をなしつつ実際生活もすることであって、学習生活と実際生活と並行するか、しからざれば学習生活中で実際生活も、実際生活の中において学習生活をもなさしめつつ一生を通じ、修養に努めしめるように仕向ける意味である⁽¹³⁹⁾」

ここでは、二つの提言をしている。学習生活（学校）を終えて実際生活（社会生活）に入るのではなく、働きながら学ぶ生活形態と、それを生涯にわたり持続させること（生涯学習）である。

高等教育の研究会である学者が、日本の社会は、「高学歴社会」ではなく、学校教育の期間が長い、「長学歴社会」にすぎないと論じていたが、牧口の考えと通じるものがあるように思う。

また、ヨハン・ガルトゥング (Johan Galtung) も、創価大学の学生との座談会で、「私は常に学生に一旦『脱出 (get out)』してみることを勧めています。それは、かならずしも海外に留学するという意味ではなく、仕事に就くことです。最悪なのは間断なく勉強し続けることです。経験を身につけるために、勉学を一旦中断するほうがよい。それからまた学校に戻る、そしてまた仕事に就く。また学校に戻る。(中略) 勉強と仕事をいったり来たりするのです。これが基本です⁽¹⁴⁰⁾。」とアドバイスしている。これらは、半日学校制度そのものを述べているのではないが、学習生活の継続が有益とはいえないと指摘している。

改めて触れる必要のないことではあるが、半日学校制度は、『創価教育学体系』において初めて提唱されたのではないし、牧口の独創でもない。斎藤正二は、1893 (明治26) 年に出版された木村一步編纂の『教育辞典』(博文館 明治26年) に、半日学校制度について詳しく紹介されていると指摘している。また、1900 (明治33) 年の『教育報知』には、月瑞子「半日学校」という論文が載っている⁽¹⁴¹⁾。牧口自身も、半日学校制度について、1906 (明治39) 年に、雑誌『教育界』の「教育茶話会」でたびたび発言している。

今の学校を何うするかといふと、半日学校といふものが本当の正しい理に合ったものであるまいかと思ふ、(中略) さう云ふ風にするならば神経衰弱の者を絶つことが出来、予防することが出来るだらうと思ふ⁽¹⁴²⁾

私は半日学校制度といふ頗る突飛な考を此前にも申して清聴を穢したことがあります。私の半日学校と申すのは、所謂二部教授とは違ふ、総ての中学校も小学校も、将た大学も皆半日制度にするのが本統だらうと信じて居りますから、目に触れるものとして皆夫れに解釈がされるのであります。唯今文部大臣の訓令からして色々の議論が出て居りますが、その中心問題たる神経衰弱とか煩悶と云ふやうなことが、凡てこの半日制度からして教はれはしないかと思はれる⁽¹⁴³⁾ (下線筆者)

とも発言している。

創立者は、開学式のメッセージにおいて、半日学校制度を受けて、「それは、過大な受験競争、学歴偏重、学問と実生活の著しい離反を招いている今日の教育への警告であるとともに、人間教育の一形態を提示したものであります。」と述べており、牧口の問題意識と重なっている。先に触れた教育の機会均等を、創立者が、人間教育の最高学府をめざす上で重要な課題としたことと、入試の不合格者を「可哀想」と、一番に思いやる心情を考えてみた時、敗者と勝者をつくるシステムや、行動を伴わない観念的な社会人をつくるのではなく、すべての被教育者が充実した人生を歩めるような教育の形態として通信教育を考えているのではないだろうか。

次に、戸田城聖が、半日学校制度に触れたものとしては⁽¹⁴⁴⁾、巻頭言「青年よ、心に読書と思索の暇をつくれ⁽¹⁴⁵⁾」がある。その前半分に次のように半日学校制度を紹介している。

故牧口会長が半日学校制度論を唱えられた。その意図は日本人は所定の学校を卒業すると、その後は学問をしないのが常態である。国家の文化向上の意味からも、又各個人の職業向上の点からも、是非とも国民全体に一生涯の間、学問をさせたいというのがその主眼であった。このことは又国家にとつて非常に経済なことでもある。なぜならば、あらゆる学校を三部制にして、午前部・午後部・夜間部とする。これは校舎の節約になり且又国家全体の労働力を増すことになる。されば今の学生が十年も二十年も只国家が養っているような現状は、これによつて打破できる故に、小学生も中学生も大学生も半日だけ勉強して、その他の時間は労働に自己の研究に、費やせるように指導するのである。

そしてその上に、大学の卒業後も又大学へ行かなかつた者も、専門の教育又は、一般教育に一生涯勉強させようと云うのである。(下線筆者)

現在、少子高齢化が問題になり、国家の生産力を支える労働人口の減少が課題となっている。半日学校制度は、最も元気な、若い世代が仕事に取り組み、かつ、最も意欲と能力のある青年が学びながら仕事に取り組むということである。もちろん乗り越えるべき課題もあるだろうが、就職しない青年をどうするかという泥縄的な対策に比べれば、半日学校制度は、継続的な社会国家の維持のためにも真剣に検討すべきことではないだろうか。

戸田が、巻頭言を書いた当時、半日学校制度が受け入れられる状況では当然ない。「暇がない」という青年たちに「朝三十分の暇を作れぬ訳がない」と語り、「吾人は、読書と思索をせよと叫ぶものである」と結んでいる。戸田は青年達に学ぶことの大事さを訴え、実際に青年の為に懇談や研修の場を作った。戸田が創立者に対して仕事の始まる前など行った「戸田大学」は、この巻頭言で述べた半日学校制度の具体的実践と見ることができるかもしれない。

③ 通信教育と人間教育

通信教育とは、“信”を“通”わせる教育

創立者の開学式のメッセージでは、教育の機会均等、半日学校制度について述べた後、「教育の本義は人間自身をつくることであり、知識を糧に無限の創造性、主体性を発揮しうる人間をはぐくむ作業といえます」として、通信教育においても知識の切り売りに終わることなく、人間教育を実現していきたいと述べている。

筆者は、1977(昭和52)年4月、母校の職員となり、通信教育部に配属になった。創価大学の通信教育は、人間教育の実現を目指していかなければと考えさせられたのは、開学式のメッセージにあった次の一節である。

私自身のことをいえば、私は学問の道を途中で断念せざるをえなかった。その代り、恩師戸田先生に、さまざまな学問を教えていただきました。それは、文字通り、人生の師と弟子との間に“信”を“通”わせた教育でありました。人間の完成より知識が、知識より学歴、資格が優先され、教育目的の逆転現象を呈している今日の大学にあって、人間の道を究めんとする皆さんの存在は、教育のあるべき姿を世に問うものと確信してやみません。(下線筆者)

通信教育という言葉に、信(信頼=心)を通わずという人間教育の魂を吹き込み、創価大学の通信教育は、単なる知識を提供する場ではなく、教育の本義である人間自身をつくることであるとしていることが重要であろう。

万人のための教育と人間教育の両立は可能か

創立者は、通信教育の場においても人間教育の実現を構想した。教育の目指す方向としては、ひとりひとりを深く啓発し、また、自立かつ継続した学習者に育てるという、手作りともいえる人間教育という方向(一人に多くの時間をかける)と、いかにして学びたい全ての人にその機会を提供するか(できるだけ多くの人に分け与える)という方向があろう。通信教育という場で人間教育を行うということは、その背反する2つを両立させるということである。

マーチン・トロウ(Martin A. Trow)は、高等教育制度の段階をエリート型、マス型、ユニ

パーサル型に分類しその特徴を表としてまとめ、エリート型（該当年齢人口に占める大学在学率が15%まで）からマス型（同 15%以上から50%まで）、さらに、ユニバーサル型（同 50%以上）に段階移行⁽¹⁴⁶⁾していくとする。日本の高等教育は、短大・専門学校を含めると該当年齢人口の60%以上が高等教育機関に進学していると考え、既にユニバーサル型の時代に入っている。筆者は、それでは、ユニバーサル型の時代の次は、日本の高等教育がどのような方向に向かうのだろうかと考えてきた。

考えられるのは、第一に、アメリカの高等教育に見られるような大学間の機能の分化⁽¹⁴⁷⁾、第二に、少人数教育への回帰、そして、第三に、通信教育に代表されるような、より大規模な高等教育システムの出現である。

第一の大学間の機能分化は避けられないことであろう。

第二のリベラル・アーツ教育に象徴される少人数教育は、教育効果も高いことは当然だが、それを低コストで行うことは極めて困難である。そのためには、大学の余分な機能を切り捨て、少人数教育に機能を特化させなければならない。難点は、希望するすべての人々にこの教育の機会を提供するにはコストがかかりすぎることである。

第三のより大規模な高等教育システムについては、映像等のメディアやインターネットにより双方向による教育も十分考えられる時代に入ったが、筆者は、メディアによる人間教育、つまり、ひとりひとりの被教育者を啓発する教育が可能であろうかという疑問をもっていた。

そして、日本における高等教育の主流は、もう一度、リベラルアーツ・カレッジに象徴されるような少人数教育、人間教育の方向に回帰するのではないかと考えていた。

そう考えていた折、日本の高等教育研究に大きな影響を与えてきたこのマーチン・トロウが来日し、その講演会で、直接、「メディアによる人間教育は可能か」という質問をすることができた。彼の答えは明快であった。ITの分野にも明るい氏は、ITの急速な進化は、それを可能にするというものであった。少人数教育への回帰を念頭に置いていた私にとっては意外な答えで、その考えをすぐに受け入れることはできなかった。しかし、時間をおいて、もう一度考えていく中で、書面による添削であっても、ちょっとした心遣いでやる気を与える児童対象の通信添削もある。映像を通じて感動したり笑ったりもする。メディアは単に知識を伝えるだけでなく、人間の啓発も可能なかもしれないと、その可能性を考えるようになった。むしろ、科学技術の発達によって、極めて多くの人々へ、心を通わせた教育も可能なのではないかと考えるようになった。その場合も、あくまで、人間がいて、技術がそれをサポートする。それによって、より多くの人に早く伝えることができるということである。

このような発想を創立者はなぜ持てたか

通信教育に学ぶ人たちは、学部生に比べ、学生数に対する教職員の数も少なく、全国に広く散っていることから、直接大学に来て教職員に接するのはスクーリング、科目試験などわずかな機会に限られる。学生同士の交流の機会も当然少ない。通信教育の開設にあたり、「信」を「通」わず教育との表現をした創立者の発想はどこから来るのであろうか。当然、メッセージにあるように戸田との交流がそうであったとして、学生が不特定多数ともいえる通信教育においても、大学と学生にそのような教育を期待したのは何故だろうか。

創立者は、入学式、卒業式、同窓の集い等、出席した会場を、たとえ二千人を超える講堂であったとしても和やかな座談の場に変えてしまう。また、大学・学園の創立者としてもそうであるが、日本の創価学会の名誉会長として、世界190カ国のSGIの会長として、あらゆるとこ

ろに気を配り、激励の手を差し伸べている。そのように行動し続けてきた創立者であればこそ、自然の言葉として、通信教育を「信」を「通」わす教育と表現することができたと思う。

創立者は、通信教育部の学生に対しても、スクーリングに参加した学生に対するこまやかな配慮や伝言とともに、メッセージ、機関誌への寄稿など創立者自らが、まさに「信」を「通」わす教育を行っている。その多くは、小説や詩を通してであり、人物のエピソードを通じてのことも多い。私の心に残っているその一例を紹介する。

なぜ学問するのかについて、太宰治の小説の中にこんな一節がありました。『正義と微笑』という作品のなかの或る教師の述懐であります。「覚えるということが大事なのではなくて、大事なのは、カルチベートされるということなんだ。カルチュアというのは、公式や単語をたくさん暗記してある事だけでなく、心を広くもつということなんだ……（中略）学問なんて、覚えると同時に忘れてしまっていていいものなんだ。けれども、全部忘れてしまっても、その勉強の訓練の底に一つかみの砂金が残ってあるものだ」（中略）一つかみの砂金——さきに自律心と申し上げましたが、それに限らず“勉強の訓練”を自分に課し、やり遂げていったところに身につく克己心や、人への思いやりといった人間の輝きこそ砂金の輝きにほかなりません（下線筆者）⁽¹⁴⁸⁾。

この一文は、学ぶことと人格の形成を考える上で、示唆に富む引用である。創価大学の目指す人間教育は、学問探求とは別々のものとして行うものではない。むしろ、通信教育であれ、通学する学生であれ、本来、「勉強の訓練」のなかでなされていくものといえるのではないか。

「人への思いやりといった人間の輝き」、それは、それぞれの目標に向っての鍛錬の中で身につくものである。しかし、この思いやりは、「思いやり」をうけた経験があってはじめて身につくものであろう。

創立25周年にあたる1996（平成8）年、創価大学を紹介する一冊の本が出版された。悠木夏文著『シリーズ大学は挑戦する 創価大学』（栄光教育文化研究所発行）である。「この本を書き上げるために、百数十人の方々にお目にかかり、インタビューさせていただいた⁽¹⁴⁹⁾」、悠木はこのように書いている。長いが引用させてもらいたい。

正木（創友会）委員長は、

「溯れば、創価大学を設立するための準備財団は、池田先生の“庶民のための大学を創りたい”との思いに賛同した創価学会員の寄付を基に作られました。創価大学は、多くの庶民の真心に支えられて創設された大学なのです。創大生には、そうした人々の思いや期待に応えられる人間になる責任があると思います」

と話す。

創価大学は、さまざまな人々の「思い」が寄せられている大学だ。その「思い」は、創立者に発して学生へ、教職員を通じて学生へ、親たちから学生へ、先輩によって後輩へ、と脈々と伝えられている。

自分が誰かによって大切にされたことや享受した恩恵に感謝し、それを後輩に返していこうとする。それをまた、後輩に……。創価大学のキャンパスは、まるで聖火リレーのように次々と受け渡されていく人々の「思い」という灯火は、それを手にした者すべてを誇らしく輝かせている⁽¹⁵⁰⁾。（下線筆者）

徹底したインタビューで得た実感として、創価大学の人間教育を、創立者にその源があり、そこから広がっていく聖火リレーに例えている。

悠木は、また、通信教育と人間教育についてこう書いている。

通教生は学ぶ意欲が高く、授業中も真剣で、教えがいがあると話す教員は多い。一方で、「教職員の方々は人間的で情があり、これほどまでに学生のためを思って配慮してくれるのかと、さまざまな場面で感動しました⁽¹⁵¹⁾」ということは何人ものOBの方から聞いた。

通信教育は、その根本に人間を大切にしたい思いがあればこそ、通“信”が通“心”へと広がっていくのだろう。そして、信が通い、心が通ったところこそ、「いつでも、どこでも、だれでも」に開かれたうえでプラスアルファのある、創価大学ならではの人間教育の味が発揮されるのではないだろうか⁽¹⁵²⁾。(下線筆者)

おわりに

通信教育部の開設構想は、21世紀に目を向けた創立者の先見であり、通信教育は、創価大学として今後さらに充実発展を期さなければならない分野である。創立者が、大学の果たすべきもうひとつの役割、すべての人々のための大学ということに目を向けていたからといって良い。また、創立者が通信教育にあっても人間教育を志向し、それを実践してきたことは、新しい大学教育を開く力である。

大学通信教育協会の資料によれば、2005（平成17）年度大学通信教育実施校は、大学35校、大学院19校、短大9校で、約28万人の学生が学んでいる。2006（平成18）年度には、大学2校、大学院6校が開設予定である⁽¹⁵³⁾。日本の大学における通信教育課程の在籍者数（正規の課程）は、1968（昭和43）年度に7万人を超えて以降、1988（昭和63）年度までの21年間、9万人を超えていない。ところが、1994（平成6）年度には14万人と、6年間で1.5倍になり、更に、2005（平成17）年には、28万人と2倍に増えている。

このような近年の大学通信教育の発展は、放送大学によって先鞭をつけられたメディア技術の導入、さらには、インターネットの普及によるところも大きい。インターネットは、明治時代に郵便制度が整備されたことにより通信教育が誕生し、その受講者が全国に広がったことと同じか、それ以上の可能性を秘めている。

21世紀の日本の大学は、少子・高齢化の中で存続を図らなくてはならない。日本の人口それ自体が2005年をピークに減少し、2050年には、8800万を割ることも考えられる速さである（『東京新聞』2005年1月1日付）。

創立者は、「時代は、学歴社会から実力社会へ移っている。語学や読書や教養は、人生を大きく豊かにする。社会に出てからも学び、見識を深め、生命の可能性を開発しゆく『生涯教育』がますます重要になる。その原動力こそ『通信教育』である。（中略）ある意味で、歴史上、教育は、長く、一部の人間のみのものであった。21世紀は、人生を舞台に、皆が『学ぶ喜び』を謳歌しながら、皆が強く賢明になっていく時代でなければならない⁽¹⁵⁴⁾。」と語っている。

今年、通信教育部は、開設30周年を迎え、今後どのように発展していくか、大きな課題である。牧口常三郎に始まる創価大学設立の構想は、大学開学によって実現されたが、その目指すところの大学教育のあり方は、創立者の現在に至るまでの行動によって示され、発言の端々に表れている。創立者は、これからの創価大学をどう構想しているのか、そして、これからの通信教育をどう構想しているのかを十分研究し、今後の創価大学の進むべき道を考え、その構想実現をめざしていきたいと思っている。

(注)

- (1) 本稿において、「創価教育」は、1930（昭和5）年11月18日に『創価教育学体系』第一巻を出版し、自らの教育理念を創価教育学として発表した牧口常三郎、その思想と構想を受け継いだ戸田城聖、そして、創立者池田大作の3人による教育と思想を指すものとして使っている。
- (2) 『創価大学通信教育部2006入学案内』による。2005（平成17）年11月現在。
- (3) アーノルド・J・トインビー、池田大作『二十一世紀への対話（上）』（文芸春秋 昭和50年）、120頁。
- (4) ケンブリッジ大学の通信教育については、Walton S. Bittner and Hervey F. Mallory, *University Teaching by Mail*, The Macmillan Company, 1933, pp.11-13 による。イギリス・アメリカにおける通信教育の発祥の歴史については、John S. Noffsinger, *Correspondence schools, lyceums, Chautauquas*, The Macmillan Company 1926, pp. 3-14 に詳しい。
- (5) 奥井晶『教育の機会均等から生涯学習へ—大学通信教育の軌跡と模索—』（慶応通信 平成3年）、13-14頁。なお、英吉利法律学校の講義録については、高梨公之の指摘による。
- (6) 斉藤正二『若き牧口常三郎』（第三文明社 1981年）、646-647頁。
- (7) 明治19年2月上旬に印刷された「通信講学会第1回報告」の裏面には、「○通信講学会員ニ広告ス」として、「本会ノ規則ニヨリ一ケ年半ノ修業ヲ終フルノ後行フベキ試験ハ如何ナル方法ニヨレルヤヲ問合ハセ来リ向往々コレアリ右ハ会員ヨリ其旨ヲ申入レ本会ヨリノ通知ヲ待チテ上京スルヲ以テ本則トスレドモ遠隔ノ地ニ在リテ上京不便ナルガ為メ最寄ノ会員合同シテ往復旅費ヲ弁ズルノ約束アレバ本会ヨリ別ニ役員一名ヲ派出セシメ講師ノ出セル問題ヲ持シテ試験場ニ臨ミ其答案ヲ携ヘ帰リテ講師ノ評点ヲ受クルコトトスルカ又ハ其地方ニテ最モ名望アリ學術アリテ教育上ノ職務ニ従事サルハ仁ニ依頼シ本会ヨリ講師ノ出セル問題ヲ送付シ試験場ノ監督ヲ托スルコトヲ為スベシ」とある。
- (8) 南榎庵主人「地理学に篤学の諸名士伝」『地理学研究』第2巻第8号（地理学研究会 大正14年8月）、29頁。
- (9) 『尋常師範学科準備通信講義雑誌』（忠愛社）が当時発行されている。同誌第16号は、明治19年9月3日に発行。
- (10) 以下の拙稿を参考にされたい。
 - ① 「牧口常三郎と通信教育—民衆のための教育を目指して—」『通信教育部論集』第3号（創価大学通信教育部学会 2000年8月）、
 - ② 「牧口常三郎は女子教育の先覚者だった。」『潮』第508号（潮出版社 2001年6月）、
 - ③ 「知られざる牧口先生の事跡」『大白蓮華』第612号（聖教新聞社 2001年6月）、
 - ④ 「創価教育の父・牧口常三郎の足跡を追って 肌で感じた人間への“温かな視線”」『灯台』第494号（第三文明社 2001年11月）、
 - ⑤ 『『人生地理学』と牧口先生』『大白蓮華』第639号（聖教新聞社 2003年6月）。
 なお、その他に、2003年3月17日東洋哲学研究所学術大会で「人生地理学出版後の牧口常三郎とその行動」と題して発表、2005年8月8日通信教育学会講演会で「創価大学通信教育部の源流—2万人が学んだ牧口先生の通信教育」と題して講演を行った。
- (11) 『同窓会雑誌』第27号（同窓教育会 明治35年2月）、53頁の雑報に牧口からの手紙の一部が紹介されている。
- (12) 明治42年1月、富士見尋常小学校任用の際に提出された履歴書。
- (13) 拙稿「上京後の牧口常三郎と『人生地理学』出版に至る経過」『創大教育研究』第11号（創価大学教育学会 2002年、47-61頁）に詳述。
- (14) 当時の新聞雑誌に42の書評が確認できる。拙稿「牧口常三郎著『人生地理学』41の書評」『創価教育研究』第2号（創価教育研究センター 2003年、261-285頁）に全文翻刻掲載。その後、『活動之日本』の書評を発見し、『人生地理学』に対する書評は42となる。牧口の書評については、沖慶子「牧口常三郎著『人生地理学』の同時代評」『地理科学』第58巻第2号（地理科学学会 2003年）、1-27頁におい

て詳細に分析されている。

- (15) 『活動之日本』第1巻第2号（隆文社 明治39年6月）、118頁。
- (16) 理由は不明だが、初版は2種類存在する。弘文堂で印刷されたものと、秀英社第一工場で印刷されたものである。
- (17) 明治33年1月から明治35年3月まで、北海道師範学校校長。牧口の辞職願を受理した。明治36年当時、女子高等師範学校教授。『教育』第68号（茗溪会 明治38年10月）、38頁の「十月の主事会」の議題の筆頭に「退職主筆、槇山栄次（以下2氏略）氏へ内規の通り謝状及び物品を贈呈する事」とあり、茗溪会にも深く関わっていた。同じ日の議題で牧口の辞任願出も協議されている。
- (18) 弘文学院は、明治39年1月に宏文学院と名称が変わるが、本稿では、弘文学院として表記する。明治39年1月としたのは、講道館所蔵資料に『弘文学院職員名簿 明治三十八年十二月現在』があること、および東京都立公文書館所蔵資料に、弘文学院関順一郎より、東京府知事千家尊福宛の、弘文学院を宏文学院に改称する「御届」の日付が、明治39年1月15日であることによる。
- (19) 講道館蔵『講道館館員名簿第一』には、本籍「北海道札幌区南一条西八丁目十三 戸主」、姓名「牧口常三郎」、生年月又ハ年齢「明治四、六」として、入門年月日「(明治) 三四、五、一九」と記されている。山口令子の調査による。この原本である誓文簿も講道館蔵。『人生地理学』出版にあたり書名について相談した坪井九馬三と、嘉納治五郎との交友は知られているが、この視点からの更なる調査が望まれる。
- (20) 『社会主義』第8年第11号（渡米協会 明治37年9月）、14-17頁。（表紙では、「米国と人生地理」）
- (21) 『渡米雑誌』第9年第1号（渡米協会 明治38年1月）、2-4頁。
- (22) 『萬朝報』明治38年12月14日、2面、「今日の注意」
- (23) 『国民評論』（国民評論社 明治38年1月創刊）第1号に「商品流動の法則を論ず」、第2号に「同（承前）」、第4号に「都府吸引論」という牧口の論文が掲載されている。それぞれ、『萬朝報』明治38年1月3日付1面「紹介新刊書」欄、『日本』明治38年3月1日付6面広告、『渡米雑誌』第9年第4号（渡米協会 明治38年4月）広告による。『国民評論』は12号まで発行が確認できる（『早稲田学報』第130号による）。
- (24) 『二十世紀の婦人』第1巻第8号（北海道婦人同志会 明治37年9月）に掲載されていると考えている。ただし、未発見。『婦女新聞』第226号1面「くちとふで」欄に「▲ 婦人と人生地理学 吾人は日本国民、就中女子教養の重任者たる日本婦人に向つて、今少しく人生地理学につき趣味を解せられん事を望む、『地を離れて人なく、人を離れて事なし、人事を論ぜんと欲せば先づ地理を究めよ』との吉田松蔭先生が其学徒を警醒したる金言は、吾人の生活区域の広がると共に益々吾人に明瞭となる一大真理にあらずや、げに吾人は地を離れては生活する能はず、生活を遂げんが為めには何よりも先づ地理を知らざるべからざる事は、単り学徒に留まらざるなり。（廿世紀婦人牧口常三郎氏）」と紹介されている。「婦人と人生地理学」の存在は、坂井博美の指摘による。
- (25) 『教育界』第4巻第8号（金港堂 明治38年5月）、57頁。教育茶話会については、三浦藤作『無冠の栄光』（曾根松太郎氏教育奉仕三十年祝賀会 昭和5年）、240-242頁参照。
- (26) 第4回教育茶話会では、牧口の肩書きは書かれていない。第5回では、「教育」記者となっている。なお、『教育界』を発行している金港堂には、牧口は、明治34年に勤めたことがある。（前出、拙稿「上京後の牧口常三郎と『人生地理学』出版に至る経過」（『創大教育研究』第11号）、49-51頁。なお、同論文にある教科書事件の始まりは、明治35年12月の誤り。
- (27) 東亜女学校は、明治37年5月、東亜精華女学校として、神田区雉子町34に開校、同年8月、東亜女学校と名称を改めた。牧口を採用した明治38年3月には、教員を志望する中国人留学生のための課程「清国女子留学生速成師範学部」を設置している。明治39年9月に、下谷区北稲荷町46に移転する。東亜女学校は、東亜仏教会によって設立され、校主は、田中舎身（弘之）で、田中は中国に深い関心を持っていた。

- (28) 一冊は、『人生地理学』出版の3年後に出版された、江蘇師範生編修『江蘇師範講義 第七編 地理』(江蘇寧 1906年)である。同書の目次には、「人生地理学」とある。もう一冊は、その翌年に出版された、世界語言文字研究会編輯部訳『最新人生地理学』(游芸社 1907年)である。これらの詳細については、高橋強「牧口常三郎著『人生地理学』中国語版に関する一考察」『創価教育研究』創刊号(創価教育研究センター 2002年)、3-20頁。
- (29) 『教育界』第5巻第5号(金港堂 明治39年3月)、59-61頁。
- (30) 「本会並に附属女芸教習所の趣旨」『大家庭』第3巻第1号(大日本高等女学会 明治40年12月)、2-3頁。
- (31) 牧口は、教育茶話会で「如何にしたら青年女子の小学校を離れた者を引立て、家庭に於て国民経済に適合した教育を施すことが出来やうかと云ふ考へで、通信教授を始めて居つたのであるが」と述べている(『教育界』第7巻第5号、金港堂、明治41年3月、121頁)。
- (32) 同上『教育界』第7巻第5号、121頁。
- (33) 「寺田勇吉の報告あり 寺田勇吉訳の『普国ジュセルドルフ県単級小学教則 附プロイセン王国半日学校教科目』を指すものと思われる。」(『牧口常三郎全集』第7巻、第三文明社、1982年)、9頁とある。『教育報知』(明治20年 45号から61号)にも連載されている。
- (34) 浜は、北海道師範学校に明治25年4月から明治27年11月まで在職している(『北海道師範学校一覧』北海道師範学校 明治44年、33頁)。市川本太郎『長野師範人物誌』(信濃教育会出版部 昭和61年)、148頁には、浜幸次郎は、諏訪郡中州村生まれ、明治17年長野県師範学校入学。明治34年下伊那女学校創立時の校長となり、「明治三十六年退職して上京する。一年間二三の中学校の講師をして三十八年東京市初代の視学に任ぜられ十一年間在職し」とある。
- (35) 牧口と山根吾一との交流は、岡林伸夫『ある明治社会主義者の肖像—山根吾一覚書』(不二出版 2000年)によって明らかとなった。二人の北海道時代の交流についての研究は今後の課題。『北海道教育雑誌』を見れば、少なくとも面識はあったと考えられる。
- (36) 片山潜『渡米案内』増補訂正第11版(渡米協会 明治37年)には、自序の次頁1頁を使って牧口が渡米協会で行った「米国の人生地理」の演説の一部を掲載している。同書初版は、自序に2頁を使っているが、11版では1頁にしている。山根吾一の考へで挿入した可能性もある。片山と出会ったと断定することは現時点では避けたい。
- (37) 前出、「上京後の牧口常三郎と『人生地理学』出版に至る経過」(『創大教育研究』第11号)、52頁。
- (38) 『秋田魁新報』明治38年7月26日、1面の新刊紹介欄に、高等女学講義第一学年第四号の科外講話は、「尾崎東京市長の時局と婦人」とある。
- (39) 『灯台』第482号(第三文明社 2000年11月)、61頁。
- (40) 伝記・年譜で14歳と記述されているが、その出典は見当たらない。前出、南榎庵主人「地理学に篤学の諸名士伝」(『地理学研究』第2巻第8号)、29頁の「年僅かに十三にして北海道札幌の親類に寄食して小樽警察署の給仕として自活の道を得るに至つたのも之がためであつた」の記述に従った。
- (41) 『教育』第68号(茗溪会 明治38年10月)、38頁には、十月二日の主事会の議題として、「書記牧口常三郎辞任願出につき其後任、及び事務所貸付条件等につき協議す」とある。茗溪会退職は、前出履歴書によれば明治38年12月。
- (42) 前出、「『人生地理学』と牧口先生」(『大白蓮華』第639号)、43頁。
- (43) 正確には、牧口は、志賀の説得に服して、今は受けることができないが、後日志賀の指導のもと地理学研究を行う時に、藤山の好意を受けることにした、である。『稲垣益穂日誌 十三巻』(小樽市博物館 1990) 3頁、によれば、藤山万吉の葬式は明治39年12月21日に行われている。
- (44) 書評・広告・新刊紹介が掲載された新聞・雑誌(東京以外)は以下の通り(太字は特に掲載回数が多いものを示す。『』略)。
北海道：北海タイムス、小樽新聞、函館新聞、北海道教育雑誌、釧路新聞、青森：東奥新聞、弘前新

- 聞、岩手：岩手日報、岩手毎日新聞、東北新報、秋田：秋田魁新報、秋田時事、山形：米沢新聞、宮城：河北新報、東北新聞、福島：福島新聞、福島民報、福島民友、茨城：いはらぎ、栃木：下野新聞、埼玉：埼玉新報、千葉：千葉毎日新聞、山梨：甲斐新聞、山梨民報、山梨日日新聞、神奈川：貿易新報、静岡：静岡民友新聞、長野：信濃毎日新聞、南信、富山：富山日報、石川：政教新聞、北国新聞、福井：福井新聞、愛知：中京新聞、新愛知、新朝報、三重：伊勢新聞、京都：京都日出新聞、大阪：大阪朝日新聞、大阪毎日新聞、初等教育教材研究、兵庫：神戸新聞、神戸又新新聞、和歌山：紀伊毎日新聞、岡山：山陽新報、広島：広島芸備新聞、山口：防長新聞、防長教育、愛媛：海南新聞、高知：土陽新聞、福岡：福岡日日新聞、門司新報、長崎：東洋日の出新聞、鎮西日報、鹿児島：鹿児島新聞、沖縄：琉球新報、台湾：台湾日日新聞
- (45) 「大日本高等女学会賛助員諸君」『高等女学講義』第2学年第3号（大日本高等女学会 明治39年1月）、「本会賛助員（順不同）」『大家庭』第3巻第1号、4-6頁。
- (46) 『小樽新聞』明治39年8月27日、2面には、「大日本高等女学会主幹 牧口常三郎氏は会務拡張の爲め来道札幌方面へ赴きたるが帰路当区に於て会員募集の上帰京すべしと云ふ」とある。『大家庭』第3巻第1号、28頁には、明治40年10月17-19日、川越中学校で、同年11月9-11日、山口県山口町新橋稻荷座で慈善活動映写会を開催した記事がある。
- (47) 新聞・雑誌の広告・書評新刊紹介・記事等に出ている高等女学会の所在地から区分した。
- (48) 三崎町三丁目1は、かなり広い地域で番地だけでは、高等女学会の所在地を明らかにすることは出来ない。『渡米雑誌』第10年第4号（渡米雑誌社 明治39年4月）、11頁に「注意 渡米雑誌社及び渡米協会は東京神田区三崎町三丁目一番地の飯田町の停留場の通りで旅人宿三崎館の横で元大日本高等女学会の跡へ移転しました（以下略）」とある。
- (49) 『読売新聞』明治38年6月6日、5面に「東京市視学決定 昨日の東京市参事会は、（中略）予て問題たりし市視学二名を東京高等師範学校理科卒業生浜幸次郎及び帝国大学文科卒業生文学士石井波平の二氏と決定したり」とある。
- (50) 前出『大家庭』第3巻第1号、30頁の「大日本高等女学会規則要項」「第二 本科教育部」に、「一 高等女学講義は各月二回（第三学年以上は合本一回）発行し正会員には無代にて配布す（略）一 修業年限 高等女学講義による修学年限は一年半として之を四学年に分つ」とある。
- (51) 『教育界』第7巻第11号（金港堂 明治41年9月）には、「大家庭三ノ六 同牛込区白銀町一九 大日本高等女学会」とある。
- (52) 『先世』第1巻第7号（先世社 明治39年5月）の広告には、家庭楽の初号は2月21日発行とある。『東亜之光』第2巻第7号（富山房 明治40年7月）の寄贈書並雑誌目録には、「家庭の楽（十六） 大日本高等女学会」とある。
- (53) 『高等女学講義』第2学年第2号（大日本高等女学会 明治38年12月）に広告がある。大日本高等女学会広告部発行で定価5銭、広告主任に品田奥松とある。品田奥松は、明治5年に荒浜村で生まれる。牧口とは、同郷の一年年下。明治37年1月に上京、品田広告社を開業した（坂井新一郎『越佐と名士』越佐と名士刊行会 昭和11年、540頁）。
- (54) 新聞に以下のような記事が掲載されている。
- 明治39年1月21日付『日本』 午後一時 三崎町で女芸実習講話、茶の湯、差し花、書法の実習講話会、同日付『東京朝日新聞』本日午後一時 三崎町同会で第三回女子技芸実習講話会、同日付『読売新聞』本日午後一時 三崎町同会で第三回女子技芸実習講話会
- 明治39年3月18日付『東京朝日新聞』 本日午後一時 神田雉子町東亜女学校で第5回技芸実習講話会（茶の湯、挿花、習字）
- 明治39年4月15日付『東京朝日新聞』 本日午後一時 安藤坂同会で第六回技芸講習講話会
- 明治39年5月19日付『読売新聞』20日午後一時 安藤坂同会で女子技芸実習講話会 5月20日付『日本』 午後一時、安藤坂同会で実習会開催、同日付『東京朝日新聞』 本日午後一時 安藤坂同会で

第七回技芸実習講話会

明治39年6月17日付『日本』 午後一時 安藤坂同会 同日付『東京朝日新聞』 本日午後一時 安藤坂同会で第八回技芸実習講話会

明治39年7月22日付『読売新聞』 本日午後一時 安藤坂同会で女子技芸実習講話会 牧口、質疑自修の仕方 担当

明治39年7月22日付『読売新聞』 本日午後一時 安藤坂同会で女子技芸実習講話会

『日本の少女』には、次の記載がある。

明治40年4月21日 第16回技芸実習講話会 質疑応答及び講話を担当 (小石川・大日本高等女学会)

明治40年6月16日 第18回技芸実習講話会 質疑応答及び講話を担当 (小石川・大日本高等女学会)

明治40年7月21日 第19回技芸実習講話会 質疑応答及び講話を担当 (深川女学校)

明治40年12月発行の『大家庭』第3巻第1号表紙裏には「本会は創立以来毎月女芸実習講話を開き既に第22回」とあるので、同年10月迄の開催は確認できる。

(55) 大日本高等女学会の滝野川観楓会の記事は以下の新聞に掲載されている。

『中央新聞』 明治39年11月3日 運動会

大日本高等女学会の観楓会 小石川安藤坂なる同会にては、本日午前十一時王子瀧の川紅葉園不動寺境内に於て、観楓会を催ふ市川教諭、浜視学、牧口主幹並に斎藤^(ママ) 吊 花氏の趣味ある講話及び児玉日本女子大学講師の插花茶儀実習等あり余興として遊戯競争、音楽活人画福引等を行ひ売店の設備もありて 午後四時閉会の予定なりと入場は婦人に限り入場券三十銭

『やまと新聞』 明治39年11月5日 会

観楓会 大日本高等女学会に於ては昨三日府下瀧の川不動寺に於て観楓会を催し会する者会長烏丸伯爵を始め会員約三百余名記念の撮影を為し散会せり

『東京朝日新聞』 明治39年10月31日 広告

来る天長節瀧の川に本会観楓会を開く会員諸嬢来会あれ講話余興大福引等あり

『東京朝日新聞』 明治39年11月3日 集会

大日本高等女学会 小石川の同会午後十一時瀧の川不動寺境内にて観楓会を催す

『読売新聞』 明治39年11月3日 会一束

大日本高等女学会の観楓会 本日午前十一時王子瀧の川不動寺境内にて開催

『都新聞』 明治39年11月3日 今明日の会合

大日本高等女学会観楓会 (本日午前十一時、瀧の川紅葉園)

『国民新聞』 明治39年11月3日 十一月三日 (土曜)

大日本高等女学会観楓会 (前十一時) 瀧の川紅葉園不動寺境内

『日本』 明治39年10月31日

大日本高等女学会観楓会 十一月三日王子瀧の川紅葉園不動寺境内に於て開会午前十一時より講話及び女芸実習及び余興等ある由

観楓会が行われた紅葉園不動寺の場所について『滝野川』創刊号(昭和58年 同編集委員会)所収の清水正之「紅葉園—明治大正の頃の滝野川の紅葉の実態」によれば、新聞記事中の「紅葉園」は通称であって、正確には滝野川園と楓楽園のことで、隣り合っており、紅葉園は雑木を伐採し紅葉を植えたところ。明治44年の地図に、滝野川園があり、現在の滝野川中学校の位置に存在する。

次に、新聞記事に共通の「不動寺」について、滝野川園の隣に正受院という寺があるが、同院に電話をしたが、不動寺という言い方は聞いたことがないとの返事であった。しかし、同院の通称は瀧不動であり、不動寺とは、正受院を指し、その一帯に楓楽園と呼ばれる紅葉を植えた公園があったのではないかと推測される。

また、清水は、紅葉園に隣接する石神井川の上流に古くから紅葉寺と呼ばれる金剛寺があると書い

- ているので、紅葉園は金剛（紅葉）寺ではないと思われる。
- (56) 牧口が大日本少女会の主幹を兼務した時期の『日本の少女』は、第4巻第4号、第6号、第7号しか現存していないので、新聞・雑誌の新刊紹介等の大日本少女会の所在地から現時点でこのように考えた。
- (57) 牧口が主幹の期間も、大西琴次郎が『日本の少女』の編輯兼発行人であるので、牧口は、編集の責任までとはってはいない。『日本の少女』は、明治38年6月創刊。日本で最初の少女雑誌は、明治35年創刊の『少女界』であるが、2番目は、『日本の少女』となる（木村小舟『少年文学史明治編 上巻』童話春秋社 昭和17年、152頁）。『日本の少女』は、第6巻第3号（明治43年3月）までの継続が確認できる。
- (58) 牧口が参加したことが判明した懇話会は以下の通り。牧口の肩書きは、記述に従った。
- 明治40年2月11日 日本橋区懇話会 牧口先生はアイヌの話をする
 - 明治40年2月24日 芝区懇話会 牧口先生出席（南桜小学校）
 - 明治40年2月24日 赤坂区懇話会 閉会間際に出席（青山幼稚園）
 - 明治40年3月3日 本郷区懇話会 牧口主幹が太閤さまの話をする（日本女学校）
 - 昭和40年4月14日 横浜市懇話会 写真掲載（日ノ出町3の69）
 - 明治40年4月21日 麻布区懇話会 牧口主幹は花の話をする（飯倉小）
 - 明治40年5月12日 京橋区懇話会 牧口先生のお話
 - 明治40年6月9日 深川区懇話会 牧口先生のお話（深川女学校）
- (59) 『日本の少女』第4巻第6号（大日本少女会 明治40年4月）。同第4巻第4号（明治40年4月）、79頁には、横浜市少女懇話会として、「▲会日 四月十四日午前九時 ▲会場 横浜市日ノ出町三ノ六九石橋エイ方」になっている。同第4巻第7号（明治40年7月）、67頁には、「前号の写真版第二頁にある横浜市懇話会員の姓名は、写真版印刷の際取落としたから、ここに掲げて置きます」として、牧口の名と共に石橋エイの名があるので、場所と日にちが特定できる。
- (60) 小夜子「大日本高等女学会大会参観記」『女学世界』第8巻第3号（博文館 明治41年2月）、154-157頁。なお、『女学世界』第8巻第5号（博文館 明治41年4月）写真版には、「大日本高等女学会記念会」として、この時の写真が掲載されている。
- (61) 附属女芸教習所の発起人会が、明治40年10月12日に田端日向邸で行われている。この頃には、「危機」を脱する道筋が見えてきていることから9月以前とした。
- (62) 前出、『大家庭』第3巻第1号、3頁。
- (63) 前出、『教育界』第7巻第5号、122頁。
- (64) 同上、121-122頁には、「今ひとつ女芸教習所を附設し、之も全く一の慈善事業として、先刻御覧に入れました綿細工と裁縫刺繍との教授を始めましたが、尚引続いて産婆、簿記と云ふやうなものを始めて、学費の乏しい女子に無料でそれを教授して職業に有り付かしてやりたいと経営して居ります」とある。
- (65) 前出「本会並に附属女芸教習所の趣旨」『大家庭』第3巻第1号、4頁。
- (66) 当時は、上京した女子学生の墮落した行動が社会問題になり、廃校を勧告される女学校もあったようだ。牧口も、「知らず各毎年の初めに当り東西より南北より汽車の満載し来る幾万の女学生中当初の希望を遂げ成功して郷里に帰るもの果たして幾許ぞ。斯くして自ら都会学生の弊風も生ずるなり」「如何にして女学の弊風を防ぎつつ多数女子の教育を普及して其の希望を満たすか」と述べている（前出「本会並に附属女芸教習所の趣旨」『大家庭』第3巻第1号、2頁）。
- (67) 『大家庭』第2巻第1号の広告チラシには、中央に「日本一の家庭雑誌 大家庭」として「何故に本誌を以て日本一と言ふか 一、実際に親切で斬新で快活で誰れにも分る 二、活動を尚び平和を重じ時代の智識を集む 三、家庭及婦人に関するどんな応答でもする」とある。
- (68) 『高等女学講義』第2学年第1号（大日本高等女学会 明治38年12月）、頁は各科目ごとについてい

- る。本文中の講義名は「外国地理学」、牧口常三郎 講述となっている。
- (69) 『高等女学講義』第2学年第2号(大日本高等女学会 明治39年1月)。
- (70) 同上。
- (71) 前出、「本会並に附属女芸教習所の趣旨」『大家庭』第3巻第1号、3頁。同28頁には、明治40年10月17、18、19日に行われたとあり、演説の日には特定できない。
- (72) 前出、「大日本高等女学会大会参観記」『女学世界』第8巻第3号、154-155頁。
- (73) 前出、『大家庭』第3巻第1号、37-38頁。
- (74) 同上、29頁の「大日本高等女学会規則要項」には、「正会員 高等女学講義に依り各学科を自修するものにして毎月金四拾銭を納むる者」とある。
- (75) 『教育界』第10巻第2号(金港堂 明治43年12月)、41-42頁のK生「学校参観 東京市内の小学校廻り」では、東京市各区の評判のよい学校を回った記事の筆頭に、最も字数を使って紹介している。
- (76) 『官報』第8362号(印刷局 明治44年5月)には、「第六条ノ三 図書館に於テハ左ノ事務ヲ掌ル 一 国定教科用図書ノ編修及発行ニ関スル事項 二 教科用図書ノ調査、検定及認可ニ関スル事項 三 教育上必要ナル図書ノ編修及翻訳ニ関スル事項 四 図書ノ管理ニ関スル事項 五 国語ノ調査ニ関スル事項」とある。
- (77) 『明治四十三年十一月十日調 文部省職員録』(文部大臣官房秘書課 明治43年)の図書課属に「牧口常三郎 牛、原、三ノ六六」とある。のちに図書課は図書館に改まる。
- (78) 牧口常三郎『教授の統合中心としての郷土科研究』(以文館 大正元年)の序言5頁には、「目下は国定教科書の編纂に従事して、居るものゝ直接に教授の實際に當つても居らず」とある。
- (79) 富士見小学校をわずか1年余で病気を理由に明治43年4月23日に退職しているが、明治43年5月3日発行の『教育界』第9巻第7号には、「▲牧口常三郎氏、文部省編集局員拝命。地理編集に従事」の記事がある。小学校退職前に記事が書かれている。
- (80) 『明治四十四年 職員録(甲)』(内閣官報局 明治43年)、578頁による。榎山栄次『教授法の新研究』(目黒書店 明治43年、401頁)には、「然るに一方には矢津昌永氏志賀重昂氏野口保興氏などの地理学者があつて人文地理学の方に力を入れ、牧口常^(ママ)次郎氏の人生地理学が盛んに行はれてをると云ふ状態であります」、また、同書403頁には、「牧口常三郎氏の人生地理学は地と人生の関係を説明する科学なり、と定義を立てて居ります」と好意的に紹介している。同氏『新教授法の原理及實際』(目黒書店 大正6年)、362頁では、「牧口常三郎氏の人生地理学の如く『地理学は地と人生との関係を説明する科学なり』と狭く解釈して居るものもある」とある。牧口は、体系出版の後、『学習研究』第10巻第5号(奈良女子高等師範学校附属小学校学習研究会 昭和6年5月)に「地理・歴史教授の根底に於ける二大問題」を寄稿しているが、当時の奈良女子高等師範学校の校長は榎山栄次である。
- (81) 前出、『創大教育研究』第11号、55-56頁。
- (82) 同上、52-53頁。『神戸新聞』の齊藤生『人生地理学』の著者に与ふには、「足下は一方に於て、学に学び、一方に於て人に学ばんとするか」とある。
- (83) 東京高等女学院編輯局編『家政顧問 家庭教師』(大日本高等女学会出版局 明治45年)、2頁。
- (84) 「去れば往昔小規模に、各部落の間になされたる競争は、今や大仕掛ケの国際的競争となれり。是に於てか万国比隣、国と国、人種と人種、虎視眈々、苟でも間隙あらば、競ひて人の国を奪はんとし、之が為には横暴残酷敢て憚る所にあらず、以て所謂帝国主義の理想に適へりとなす。(略)人の物を盗むものは盗として罰せらるゝも、人の国を奪ふものは却つて強として畏敬せらるゝ時世にあらずや。」(『牧口常三郎全集』第1巻 第三文明社 1983年、14-15頁)。
- (85) 「人道的競争形式は之を今日の国家間に於て見る能はざれど、生存競争場裏の最終の勝者が必ずしも経済的優勝者にあらずとは現在に於ても既に思想発達の或る程度以上の者には認識せらるゝ所なれば、経済的闘争時代に代はつて次ぎに来るべきものは人道的競争形式ならんとは吾人の想像に難からざる所なり。然らば人道的競争形式とは如何。(中略)無形の勢力を以て自然に薰比するにあり。即ち威服

の代はりに心服をなさしむるにあり。」（『牧口常三郎全集』第2巻 第三文明社 1996年、398-399頁）
 (86) 帝国主義の時代の競争については、建部遯吾の論文（「国際競争と帝国主義」（『日本人』第178号、政教社 明治36年1月、86-90頁と考えられる）を参考要書に挙げているので、建部の挙げた競争と比較する。

建部遯吾	牧口常三郎
(帝国主義による) 軍事的競争	軍事的競争
	政治的競争
(帝国主義による) 経済的競争	経済的競争
(帝国主義による) 文化的競争	
	人道的競争

(87) 東京専門学校出版部、明治34年出版。同書は、以下の言葉で結ばれている。「今日の如き国際的競争激烈なる時に方りて永久平和の黄金時代を夢想するは迂愚の譏（そしり）を免る可らずと雖も然れども世界の強國にして共同利益の存在を認め文明の進歩、世界の開発と云ふか如き大事業に就ては各国其の利害の衝突を患ふるの要なきを知らば茲相共に人道の勝利を歓喜するの時の必ず遠からずして来る可きなり」（下線筆者）。

(88) 年譜牧口常三郎・戸田城聖編集委員会編『年譜牧口常三郎・戸田城聖』（第三文明社 1993年）、156、184頁。

(89) 『『推理式指導算術』各版の発行年月日（判明分）』本紀要168-169頁参照。

(90) 西野辰吉『伝記戸田城聖』（第三文明社 1985年）、99-100頁に記述がある。また、模擬試験を受験したという証言もあるが、詳細は不明。

(91) 複写を閲覧したが、実物の所在は不明である。

(92) 戸田城聖のこと。戸田城聖『若き日の手記・獄中記』（青娥書房 1970年）、72頁には、「戸田晴通を戸田雅皓に改名す 大正七年五月三日」とある。戸田城外『中等学校入学試験の話と愛児の優等化』（城文堂 昭和4年）では、著者戸田城外、発行者戸田雅皓と使い分けている。『『推理式指導算術』第11版（城文堂 昭和7年）では、著者戸田城外、発行者戸田雅皓、同第34版（日本小学館 昭和9年）では、著者・発行者とも戸田城外。雅皓は、城文堂発行の雑誌、単行本の発行者名として使用されている。東京堂編『出版年鑑 昭和九年度』（東京堂 昭和9年）、815頁には、「新教材集録」、「誠文堂」、「品川区上大崎三ノ三三六」、「▲進展環境に留意した新しい教材雑誌」、創刊年月は、「昭和8年9月」となっている。誤りか。

(93) 『昭和8年9月刊行 東京書籍商組合員図書総目録』（東京書籍商組合事務所 昭和8年）、341頁には、「城文堂 戸田雅皓」の項目に『進展環境新教材集録』が掲載されており、「牧口常三郎編」となっている。

(94) 『帝国銀行会社要録 第26版』（帝国興信所 昭和13年）、398頁には、「株式会社日本小学館 設立 昭和9年10月」となっている。

(95) 児童の村生活教育研究会編輯『生活学校』第1巻第7号（扶桑閣 昭和10年7月）、27頁、第1巻第8号（扶桑閣 同年8月）、21頁の交換雑誌欄に『新教材集録』が、第1巻第9号（扶桑閣 同年9月）、20頁に『新教』が出ている（江沢敏和氏の調査による）。

(96) 戸田の編著、監修は一覧から除いた。

(97) 『『推理式指導算術』各版の発行年月日』、本紀要168頁参照。

(98) 『『推理式指導算術 普及版』各版の発行年月日』、本紀要169頁参照。

(99) 正確には、『小学生日本』、『小国民日本』、『少国民日本』と併記するか、『小学生日本』とその後継誌と表現すべきところを、『小学生日本』で代表して記述することがある。

(100) このことに関しては、高崎隆治からの聞きによる。

- (101) 例えば、『新潟日報』では、昭和20年9月8日から、昭和21年5月16日まで23回掲載、他に『神戸新聞』、『北海道新聞』、『熊本日日新聞』、『京都新聞』、『中部日本新聞』で確認。
- (102) 1945（昭和20）年10月8日の『朝日新聞』の広告以降は、東京市神田区西神田二ノ三となる。
- (103) 1946（昭和21）年5月3日以降は、『民主主義大講座』の広告が掲載されている。
- (104) 『人間革命』第1巻（聖教新聞社 昭和40年初版）、117頁。
- (105) 同上、141頁。
- (106) 『朝日新聞』昭和21年6月26日、1面の広告等では全6巻となっているが、出版が確認できるのは5巻まで。
- (107) 奥付が日正書房となっており、裏表紙が大衆社となっている子母沢寛『起上り小坊主』が昭和20年3月15日に発行されている。発行者は、戸田城聖。改名が同年7月とすれば、発行年月日が誤りか。
- (108) 1946（昭和21）年3月、創価教育学会から改称。
- (109) 『創価教育学体系』出版以前の1929（昭和4）年に、『創価教育学大系概論』という小冊子が発行されている。また、1930（昭和5）年6月に出版された戸田城外著『推理式指導算術』も11版より前は未見であるが、初版より背表紙には「創価教育学原理による推理式指導算術」となっていると推測できる（『進展教材 環境』第1巻第9号、昭和5年11月の『創価教育学体系』の広告による）。
- (110) 伝記、年譜で新堀尋常小学校とあるのは不正確。新堀尋常小学校は、浅草区小島町48に存在する（『東京府市学事関係職員録』帝都教育会 昭和5年）、136頁。
- (111) 『新教材集録』5月号 第4巻第4号（日本小学館 昭和9年5月）、17頁には、「日本小学研究会宣言（前略）斯に全国憂国俊秀の教育研究家参集し、教育理論、實際教育技術について真摯なる研究、批判、検討をなし、是れを發表実行し聊か教育界の革正、進展に資せんとして、斯に日本小学研究会の結成を宣言す。日本小学研究会 事務所 東京品川区上大崎三ノ三三六 時習学館」とある。また、同号、35頁「編輯室」には、「氏の論文は、日本小学教育学研究会々長にして曾て人生地理学を著されし地理学の権威牧口常三郎先生の極力推薦される所にして」（下線筆者）とあり、牧口が、日本小学研究会の会長であったことが分る。その詳細は今後の研究課題。
- (112) 『東京中央電話局電話番号簿 昭和14年4月1日現在』には、麻布区内で菊水とあるのは、「菊水料理店 高橋登女 麻、山元、五七」だけである。
- (113) 金子貞子は、『将来、私が研究している創価教育学の学校を必ず僕が、僕の代に設立できないときは、戸田君の代で作るのだと、小学校から大学まで私の研究している創価教育学の学校ができるのだ。』としきりにおっしゃっていました。」と語っている（『牧口常三郎全集月報 4』、第三文明社、1982年、6頁）。この話の時期について、月報には触れていないが、金子は、「あのお話は、昭和十四年四月のことです。縁あって私が牧口先生の三男・洋三と結婚した翌月の歓喜寮の座談会でのことでした。」（『聖教新聞』1999年9月21日付、5面）と書いている。牧口の創価大学についての金子の証言は、紀伊國屋書店ビデオ評伝シリーズ 学問と情熱第33巻の『牧口常三郎 こどもたちのしあわせのために』に収録されている。また、小平芳平も、1955（昭和30）年11月3日、後楽園球場でおこなわれた創価学会春季総会において、「かつて先代の会長牧口先生が絶えず、創価大学、総合大学という事を、お話になって居られましたが、その総合大学の実現、総合大学の建設も必ずや間近いものと、確信してやまないものであります」と述べている（『聖教新聞』昭和30年11月13日、2面）。
- (114) 和光社、聖教新聞社から出版された『戸田城聖全集』には、ともに大学構想についての記述が見当たらない。
- (115) 池田大作『若き日の日記I』（会長就任七周年記念出版委員会 昭和42年）、120頁。
- (116) 池田大作『新・人間革命』第15巻（聖教新聞社 2006年）、106頁。
- (117) 詳しくは、伊藤貴雄『少年日本』掲載の山本伸一郎『ペスタロッツ』について（1）『創価教育研究』第4号（創価教育研究センター 2005年）、31-62頁。
- (118) 『少年日本』10月号の広告が、『朝日新聞』9月8日付、『読売新聞』9月3日付に掲載されている

- ので、10月号の発行は、9月上旬と考えられる。
- (119) 前出『新・人間革命』第15巻、108頁。
- (120) 同上、108頁。
- (121) 池田大作『新・人間革命』第12巻（聖教新聞社 2004年）、308頁。
- (122) 創価学会学生部に、高等部の設置が発表されたのは、1964（昭和39）年6月1日、男子部幹部会のときである。創価大学の設立構想発表と同時期というのは興味深い。
- (123) 創立者は、この時、「将来、公明党が軌道に乗り、また、正本堂が建立された暁、それ以降に」と述べている。正本堂建立は、1972（昭和47）年10月であるから、1973（昭和48）年以降に創価大学開学を考えていたと思われる。前出『新・人間革命』第15巻には、「当初、大学の開学は73年（昭和48年）にするとの計画もあったが、高校の一期生が卒業する71年（昭和46年）に、予定が繰り上げられたのである」（109頁）とある。
- (124) 『聖教新聞』昭和43年3月10日、1面には、「当初、昭和四十七年開校の予定になっていたが、高校の開校を前に各方面からの要望が一段と強くなり『昭和四十六年の開校を目指して検討を進めてはどうか』との池田会長（審議会長）の提案に基づき、これにともなう組織編成の大綱が発表された」とある。
- (125) 高瀬広居は、1962（昭和37）年の創立者へのインタビューで「将来学会は学校をつくらなければならぬと思っています。三百万世帯の学会員の方々にとどしどし勉強してもらって、新しい文化の担い手になって貰うのです」（『第三文明の宗教』弘文堂 昭和37年、127頁）と聞いている。この発言には、既に社会人も学べる学校というイメージがあったのではないか。
- (126) 池田大作『新・人間革命』第14巻（聖教新聞社 2005年）、10-11頁。
- (127) 1966（昭和41）年の大学・短期大学進学率は16.1%。
- (128) 『聖教新聞』昭和41年3月30日、2面。
- (129) 1966（昭和41）年の10大学合計の卒業生数は、2,171人（文部省『学校基本調査』による）。
- (130) 『聖教新聞』昭和44年8月17日、1面。
- (131) 『聖教新聞』昭和45年12月25日、1面。
- (132) 前出、岡安博司「創価大学の開学を語る—創立者の大学構想を中心に—」（『創価教育研究』第4号）、178頁。
- (133) 「開設20周年特別寄稿 真の教育は働き学ぶ人生の中に」（『学光』第20巻第2号（創価大学通信教育部 1995年5月）、4頁）。
- (134) 前出、岡安博司「創価大学の開学を語る—創立者の大学構想を中心に—」（『創価教育研究』第4号）、182-183頁。
- (135) 池田大作『池田名誉会長の青春対話Ⅱ③—21世紀の主役に語る—』（聖教新聞社 1999年）、34頁。
- (136) 同校については、『開成・昌平史』（開成・昌平史編集委員会 1991年）参照。
- (137) 『牧口常三郎全集』第5巻（第三文明社 1982年）、94頁。
- (138) 『牧口常三郎全集』第6巻（第三文明社 1983年）、156-157頁。
- (139) 前出、『牧口常三郎全集』第6巻、212頁。牧口は、『創価教育学体系』の緒言において、戸田の『推理式指導算術』が、創価教育の実証であり、先駆であると称えるにあたり、デンマークの国民高等学校におけるグルントウィッヒと後継者コールドの例をあげている（前出、『牧口常三郎全集』第5巻、9頁）。学校教育だけでなく、社会人の生涯学習に目配りをしていればこそ、この記述が生まれたのではないか。
- (140) 『SOKA UNIVERSITY NEWS 10号』（創価大学 1996年7月）、3頁。
- (141) 月瑞子「半日学校」（『教育報知』第637号（東京教育社 明治33年）、12-14頁）。
- (142) 「第13回教育茶話会」（『教育界』第5巻第5号（金港堂 明治39年3月）、60-61頁）。
- (143) 「第17回教育茶話会」（『教育界』第5巻第9号（金港堂 明治39年7月）、62-63頁）。

- (144) 『教育研究雑誌 小学校』昭和8年6月号(教育学会研究会)、86-87頁に、戸田がインタビューに答えて、小学校長登用試験制度の実施、視学制度の廃止とともに、半日学校制度論について述べている。
- (145) 『大白蓮華』第50号(聖教新聞社 昭和30年7月)、1頁。
- (146) 天野郁夫、喜多村和之訳『高学歴社会の大学—エリートからマスへ—』(東京大学出版会 1976年)、194-195頁の「高等教育制度の段階移行にともなう変化の図式」。
- (147) 館昭『大学改革 日本とアメリカ』(玉川大学出版部 1997年)、19頁の「カーネギー分類におけるアメリカの大学類型(1994年/3,595校)」。
- (148) 池田大作「聡明なる庶民の学士たれ」『学光』100号記念号(創価大学 1984年)、2-3頁。
- (149) 悠木夏文『シリーズ大学は挑戦する 創価大学』(栄光教育文化研究所 1996年)、272頁。
- (150) 同上、203-204頁。
- (151) 森田希一は、共著『「援助」する学校へ—学びの援助活動としての教育実践—』(川島書店 2001年)の「第5章 『学び』の『援助』をめざした学校改革—現代のさまざまな実践例」のなかで、創価大学・通信教育部のスクーリングの教壇に立った経験を、「『学び』の『援助』をめざした学校改革の実践例」として紹介している。
- (152) 前出、『シリーズ大学は挑戦する 創価大学』、91頁。
- (153) 私立大学通信教育協会のホームページ (<http://www.uce.or.jp>) による。但し1短大は学生募集を行っていない。
- (154) 「創価一貫教育会議スピーチ」『聖教新聞』2002年12月12日、3面。